

綴り字改革論と十九世紀イギリスの言語科学 —ロバート・レイサムとヘンリー・スウィートの場合—

山 口 美知代

はじめに

第1節 ロバート・レイサムの綴り字改革論

- 1.1 言語学者ロバート・レイサム
- 1.2 「イングランドとアメリカの著述家への呼びかけ」(1834)
- 1.3 「表音式綴り字の原則」(1859)
- 1.4 『表音式綴り字の擁護論』(1872)
- 1.5 『英語』と綴り字改革論
- 1.6 翻字・音声表記と綴り字改革論

第2節 ヘンリー・スウィートの綴り字改革論

- 2.1 音声学ヘンリー・スウィート
- 2.2 『音声学提要』付録「綴り字改革の原理」(1877)
- 2.3 「綴り字改革と英文学」(1884)
- 2.4 「綴り字改革と言語の実際的研究」(1885)

はじめに

本稿では、ロバート・レイサム (Robert Gordon Latham, 1812-1888) とヘンリー・スウィート (Henry Sweet, 1845-1912) の綴り字改革論を分析の対象として取り上げ、19世紀イギリスにおける英語綴り字改革運動が、同時代の言語科学の発展と密接に結びついていた様子を明らかにする。

イギリスにおける英語綴り字改革運動は、1870年代の後半から1880年代の前半に、大きな盛り上がりを見せ、社会的な関心を集めた。1870年に基礎教育法が制定され、国家が全国民の初等教育に責任を負うことが定められていた。こういう時代状況が、「読み書き習得が難しい」とされる英語の正書法を問直す運動に、人々の関心を向けたのである。このときの運動を中心となって担ったのが、基礎教育の関係者と言語学者・音声学たちであった。

実際には、19世紀後半の綴り字改革論が、イギリスでの英語の綴り字に反映された跡はほとんどない。この時期の綴り字改革運動は、一方で、基礎教育関係者の読み書き教育効率化への関

心、他方で、言語学・音声学者の音声表記体系への関心を大きな原動力にして展開されたが、具体的な改革には結びつかなかった。読み書き教育の議論、音声表記体系の議論は、暫時、綴り字改革運動と接点を持ち、運動を活性化させたものの、また数年ののちには、それぞれ別方向へ進んでいったのである。

本稿では、こうした全体的見取り図を前提としながら、特に言語学者・音声学者の側から見た綴り字改革運動に焦点をあて、彼らが綴り字改革を支持した理由を、当時のイギリスの言語科学がおかれていた状況のなかで考察する。筆者は別の機会に、ロンドン学務委員会（London School Board）の王立調査委員会設置の請願（1878）や基礎教育に携わった人々を主題として綴り字改革運動の関わりを論じ（山口2005）、また、言語学会（Philological Society）の綴り字改革案（1881）を取り上げて、言語学者・音声学者たちの綴り字改革への関わりを論じた（山口2004）。本稿は、再び後者の視点によるもので、個別の言語学者の具体的な論考を取り上げることによって、さらに論を深めようとするものである。

なお、ロバート・レイサムとヘンリー・スウィートをとりあげるのは、彼らがいずれも同時代に影響力のあった言語学者であると同時に、綴り字改革運動史の観点からも、興味深い論考を複数著した著者だからである。とりわけ、ロバート・レイサムは、従来、十九世紀の綴り字改革史を考察する際に、あまり言及されることがない人物であるが、彼の綴り字改革論は、1830年代という早い時期に、比較言語学者ラスムス・ラスクの影響を受けた論として発表したという特徴がある。本稿では、これまで英語圏でも詳しく紹介されることがなかったレイサムの綴り字改革論に注目し、その内容と綴り字改革論史における位置づけを明らかにする。

一方、スウィートをとりあげたのは、スウィートが音声学の発展に果たした役割が非常に重要であるので、彼の綴り字改革論は、音声学者が綴り字改革に果たした貢献の代表例といえるからである。スウィートの綴り字改革運動が、言語学会を舞台にしていたという点で、影響力が大きいことも彼を取り上げる理由のひとつである。

レイサムとスウィートの二人の生きた時代や、バックグラウンド、関心領域は、ある部分では重なるものの、本質的には大きく異なっている。民族学的関心の強かったレイサムと、音声学的関心の強かったスウィートの両方を取り上げることで、綴り字改革に携わった言語学者のなかの多様性と共通点を考えてみたい。

第1節 ロバート・レイサムの綴り字改革論

1.1 言語学者ロバート・レイサム

言語学者・民族学者ロバート・ゴードン・レイサムは1812年に生まれ1888年に亡くなった。アイザック・ピットマン（1813-1897）とほぼ同じ時代を生きている。最もよく知られている著書は、教科書として広く読まれた概説書『英語』（*The English Language*, 1841）と、民族学の『人類の変種の自然史』（*Natural History of the Varieties of Man*, 1850）であろうが、他にも

『比較言語学原理』(*Elements of Comparative Philology*, 1862) など多くの業績を残している。精力的な仕事振りのなかには、1852年にロンドンで開かれた万国博覧会において、水晶宮での民族学分野展示を監督したことや、1866年から1870年にかけてサミュエル・ジョンソンの辞書を改訂したことなどがあげられよう。医学も修め、治療、教育に携わった経験を持っている。1848年には王立協会のフェローに選ばれている。多才で多作なヴィクトリア時代の知識人の一典型であった。

しかしながら、レイサムがほぼ76年にわたるその生涯を終えたときに、『アシーニウム』誌に追悼文を書いた古い友人セオドア・ワッツ (Theodore Watts, または Theodore Watts-Dunton, 1832-1914) は、レイサムの活躍した時代がかなり前に終わっていたことを隠さなかった。「長年にわたって、イギリス著述業界の大物であり、ロンドンで有名人の後を追いかける外国人たちが、最初に探し求める人々の一人であったレイサムも、世の中に姿を見せなくなっていたので、まだ亡くなっていなかったのかと思う人も多いであろう」(Watts 1888, p.340) という書き出しで記事を始めから、レイサムの輝かしい過去を振り返ったのである。

今日の関心から見るならば、言語学史や英語学史におけるレイサム再評価の嚆矢となったのは、1960年にユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンの教授職に就くことになった英語学者ランドルフ・クワークが行った記念講演であった。レイサムが120年以上前に就いていた教授ポストに就任したクワークは、「母語の研究」と題する講演のなかで、レイサムの業績と貢献を詳しく述べた。「ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン内部での評価にとどまらず、言語学および英語学の歴史という広い文脈のなかで、レイサムを位置づける試みは、あまりなされてこなかった」と概観したうえで、それに対する修正を試みたのである (クツイス 2003, p.66)。

その後、19世紀の英語学史の研究が進むなかで、英語研究においてレイサムが占めた位置も明らかにされるようになった。たとえばドイツの英語学者グノイスは、「19世紀半ばのイギリスでラスクとグリムの考えを広めるのに最大の貢献をした学者は明らかに、文献学者、民族学者かつ医学者でもあるロバート・レイサムであった」と評価していた (Gneuss, p.46)。また、近年の国民国家生成期の英語論の政治性を論じる研究では、社会言語学者トニー・クラウリーが、レイサムの『英語』および一連の英語史・英文法教科書を取り上げ、これらがある一定の英語観を作り上げ、研究・教育対象としての「英語」の制度化を推進した過程を論じている (Crowley 1989, p.30)。このほか、レイサムが追究した言語学と民族学の接点についてのアースレフの指摘 (Aarsleff 1983, p.208) については、言語思想史家アルターがさらに議論を深めている (Alter 1999, pp.30-2)。

さて、そのロバート・レイサムを本章の主人公としてとりあげるのは、ほかでもない、彼が長きにわたって綴り字改革論者でもあったからである。レイサムはすでに1834年に、綴り字改革の論考「イングランドとアメリカの著述家への呼びかけ」を出版し、1857年にはピットマンと共に表音式綴り字コンテストの審査員を務めた。1859年には「表音式綴り字の原則」が出ており、1872年には『表音式綴り字の擁護論』が書かれた。1870年代後半のロンドン学務委員会による

請願運動にも、名前が見られる。19世紀におけるイギリスの綴り字改革運動に対して、もっとも早い時期から論を発表していた一人であり、もっとも長い間関心を持ち続けていた人の一人でもあった。

本節の目的は、レイサムの綴り字改革論の内容を紹介し、それらが綴り字改革運動の歴史のなかで持った意味、および、19世紀の言語学研究の歴史のなかで占めた位置を考えることである。具体的に取り上げるのは、レイサムの1834年、1859年、1872年の綴り字改革論であり、それぞれを1.2, 1.3, 1.4で扱う。その後、1.5では、特にレイサムの英語教科書執筆と、綴り字改革論の兼ね合いについて考える。また、1.6では、言語研究における翻字・音声表記と、綴り字改革論について考察する。

1.2 「イングランドとアメリカの著述家への呼びかけ」(1834)

【前半生略歴】

ロバート・ゴードン・レイサムは1834年、「イングランドとアメリカの著述家への呼びかけ、アルファベットと正書法を永久に改造する必要性と実用性に関して」(“An Address to the Authors of England and America, on the Necessity and Practicability of Permanently Remodelling their Alphabet and Orthography,” 1834, 以下、「著述家への呼びかけ」と略す)を、ケンブリッジとロンドンで出版した。合計50ページの小冊子である。このときレイサムはまだ20歳代の前半、大学卒業直後であり、「著述家への呼びかけ」は最初期の出版物の一つであった。

執筆の背景を理解するために、まず、レイサムの前半生の伝記的事実を記しておこう。

1812年3月24日、ロバート・ゴードン・レイサムはリンカンシャーのピリングバラで牧師の長男として生まれ、イートン校に進学した。1829年にケンブリッジ大学キングズ・カレッジに進んだ。大学では1832年にはキングズ・カレッジのフェローとなり、1848年に結婚してその資格を失うまでその職にある。大学を卒業した1833年にレイサムは、言語学(philology)の研究のためにヨーロッパ大陸に渡り、ハンブルク、コペンハーゲンに滞在したあと、ノルウェーを訪れ一年間滞在した。帰国後、「ラスクの歯擦音に関する考察とグルジア語、アルメニア語で書かれた著作をヨーロッパの文字を使って転写する方法の概要：コメント付」(“Abstract of Rask's Essay on the Sibilants, and his Mode of Transcribing Works in the Georgian and Armenian Languages, by Means of European Letters; with Remarks,” 1834, 以下「ラスクの歯擦音論概要」と略)、「著述家への呼びかけ」(1834)、「ギリシア語と英語の文字によるギリシャ語文法」(“A Greek Grammar with the Greek and English Characters,” 1835)などを発表した¹⁾。1839年にはユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンの英語英文学教授に就任し、1845年まで勤めることになる。なお、ノルウェーでの経験は、1840年に『ノルウェーとノルウェー人』という書物の形で発表された。

【比較言語学的アプローチ】

さて、「著述家への呼びかけ」は、タイトルの通りレイサムがアルファベットと正書法の改造を呼びかける論考である。この論考で、レイサムが中心的に議論しているのは、英語のアルファベットと英語の正書法の改良であった。ただ、特徴的なのは、当時ドイツを中心とするヨーロッパ諸国で、盛んになっていた比較言語学的な考え方が、意識されていることであった。

もっとも、レイサム自身が、比較言語学を意識していると書いているわけではなく、さらに、現在我々が「比較研究」と「対照研究」を区別して考えるような区別も、レイサムは意識していなかったようである。ただ、例えば英語の <ph>, <th>, <sh> が表す音を論じるのに、「帯気音表記」について、古代ギリシャではどう表記したか、ヘブライ語ではどうだったか、ということに言及しながら、論を進める、というような方法 (pp.6-9) は、やはり、レイサムがヨーロッパで比較言語学から受けた影響を感じさせるのである。このほか、「歯擦音のjとch」, 「鼻音のng」, 「母音と二重母音」, 「不要な文字」, 「二重母音」などの項目についても議論が進む。その際に、言及される言語には、たとえば、ギリシャ語、ラテン語、サンスクリット語のほか、ヘブライ語、ノルウェー語、デンマーク語、ドイツ語、フランス語、スウェーデン語、ポルトガル語、そして、印欧語以外ではマルタ語、チェロキー語も入っていた。

「著述家への呼びかけ」は、決して読みやすい論考ではない。多様な言語との比較がなされるが、体系立ったものではなく、他言語における文字の音価の議論が、英語の事例にどうつながるのかも、わかりにくい。意地悪な言い方をすると、他の言語の例を引いてくることで、比較言語学的な装いはまとっているものの、それが英語のアルファベットの改良にどのような具体的意味をもつのか、わからない例も少なくないのである。

ただ、19世紀のイギリスの綴り字改革論が数多くあるなかで、これほど他言語の文字と音価の問題に強い関心を示した綴り字改革論は、きわめて珍しいともいえる。他言語との比較を強く意識した綴り字改革論が、1830年代半ばという時期に出たことは、従来の綴り字改革運動史では、ほとんど指摘されてこなかったことであり、注目に値するであろう。

なお、レイサム自身が、「著述家への呼びかけ」の冒頭で掲げている、綴り字改革が必要な理由というのは、社会的要因であった。19世紀には、廉価な印刷物の流通により、それまで特権階級の専有物であった知識が、下層階級にももたらされると思われたが、結局知識情報を得たのは、ミドルクラスまでで、より下層の階級には届かなかったこと、その原因は、金銭的なものではなく、それよりも深いところに根ざしており「綴り字の複雑さが原因で知識への接近が難しいこと」(p.4) が原因であるということ、レイサムは説いているのである。

こうしてレイサムが綴り字改革の目的として、下層階級への知識伝播を挙げるのは、後の19世紀後半の基礎教育関係者たちの議論と通じるところがある。が、レイサムには、労働者階級の子どもの基礎教育、公的初等教育といった具体的イメージはないという点で、両者は決定的に違っていた。そして、その違いは、40年近い時代の差ももちろんあるだろうが、やはり、レイサムがこの論考を著すなかで議論の中心に据えたのは、社会や教育に関する論点ではなく、比較言

語学的な議論だった、という点があげられよう。

【ラスクから受けた影響】

「著述家への呼びかけ」というタイトルの英語綴り字改革論を、他言語との比較の視点から書いたときのレイサムが、最も大きく影響を受けていたのは、デンマークのラスムス・ラスク (Rasmus Rask, 1787-1832) であった。

ラスクはドイツのポップ、グリムと並んで、初期の比較言語学の発展に重要な貢献をしたデンマークの比較言語学者である。1814年にデンマークの王室学術協会に提出した論文「古代北欧語すなわちアイスランド語の起源に関する研究」によって、協会が出していた懸賞論文の課題「古スカンジナビア語に関し、その起源をたどりうる最も確実な経路を、史的批判を踏まえて調査し、適切な例をあげて明らかにすること」に応え、賞を受けた。提出の4年後1818年に公刊されたラスクのこの論考は、比較文法の最初期の論考の一つであり、1816年にポップが現した「ギリシア、ラテン、ペルシア、ゲルマン諸語のそれとの比較による、サンスクリットの動詞活用組織について」と比較して、どちらが最初の「比較文法」研究と見なされるかが、言語学史的に議論の対象となるところである。ただ、これは本稿の主題にとって、あまり重要なことではない。

むしろ、イギリスにおける言語研究にとってより重要だったのは、ラスクが1817年に出版した『アングロ・サクソン文法』であった。というのも、これは、古英語研究の科学的研究の基礎を築いた最初の本格的な研究書であり、デンマーク語で出版されたラスクの『アングロ・サクソン文法』が、ベンジャミン・ソープ (Benjamin Thorpe, 1782-1870) によって英語に翻訳され、1830年、コペンハーゲンで出版されたことで、イギリスにおける英語研究は大きく歩を進めることになったからである。英語史の科学的な研究が、イギリス国内からではなく、デンマークの学者によって始められたことは、19世紀初めのイギリスが、新しい言語科学研究においてドイツや北欧など大陸諸国の後塵を拝している状況を象徴していた。

さて、ラスクは、1816年から1823年までコペンハーゲンを離れ、インドに向かい、古代インドやイランの写本を多く持ち帰った。デンマークに帰国後は、経済的に苦しい条件のなかで、著作活動を続けたが、比較言語学に関する新しい知見を発表することはなく、以前に準備していたものに手を入れて発表することが続いた。そして、1832年に44歳の若さで亡くなるまでのこの時期に、ラスクは、デンマーク語の正書法改革論にも「積極的に、また、辛辣な調子で参加」(Markey 1976, p.xxiii) しており、1826年にデンマーク語の「科学的綴り字改革論」(en videnskabelig dansk Retskrivningslaere) を発表している (Diderichsen 1976, p.174)。ラスクの初期の論考を高く評価する言語学史家たちは、総じて、ラスクの正書法改革論については評価が低い。改革案は「論議を呼ぶもの」であったと言い (Davies 1998, p.125)、また「ラスクが比較言語学研究ではなく、正書法改革の問題などに力を注いだのは勿体ないことだった」とまで言った (トムセン 1968, p.91)。

ただ、ラスク自身にとっては、デンマーク語の正書法改革は、生涯を通じて大きな関心を持ち

続けた問題であった。きっかけは十代のころ大聖堂学校時代に、副校長であったブロック(1772-1862)が1805年に著した、『デンマーク語の一正書法の大要』を読み、正書法や音声研究への関心を抱くようになったことであった。この時期にラスクが試した正書法は、「急進性の点では、彼が何年も後に保守的ブルジョワの度肝を抜いた正書法をずっと上回るものであった」(イエスペルセン1988, p.19)という。そもそもラスクの苗字はRaschという綴り字で、父親はそう綴っていたのだが、ラスク自身が、合理的な正書法を求めようとするあまり、Raskに書き換え、これを用いるようになったほどだったのである(イエスペルセン1988, pp.3, 43)。王室学術協会から賞を受け、比較言語学者としての地位を確立した後も、ラスクの正書法改革への関心は衰えることはなかった。

【レイサムとラスク】

レイサムは、ラスクの言語学的原理に対して自分が抱いている思いについて、「ラスクの真価がわかるようになるにつれてますます賞賛の思いが強くなった」(Watts 1888, p.340)と友人に語っていたという。レイサムは、初期のうちから言語学者として、ラスクの著作に共感するところが多かったことも認めていた。

レイサムはラスクと、個人的な交流があったのだろうか。レイサムがコペンハーゲンを訪れたのは、1833年のことであり、ラスクはすでに前年に44歳の若さで亡くなっている。おそらく両者のあいだには、それ以前にも個人的な交流はなかったのではないかと思われる。レイサムはデンマークへの短期滞在について、『ノルウェーとノルウェー人』冒頭で触れており(Latham 1840b, pp. 8-9), そこでラスクについてのエピソードを、伝聞の形で記している。内容は他愛のないもので、ラスクが、東洋通のあるイギリス人と、コペンハーゲンの王立図書館で話す機会を得たときに、デンマーク人のラスクは英語が堪能で、そのイギリス人もデンマーク語が堪能であったにもかかわらず、二人は英語やデンマーク語で話すことをせず、どちらもが覚えのあったペルシャ語で話した、というものに過ぎない。学術書というよりも、紀行文と呼ぶほうが相応しいこの本には適切な一挿話で、レイサムはラスクの人間的な一面を表そうとしたようである。ただ、推測にすぎないが、もし、レイサム自身が、ラスクとのつながりを直接であれ書簡を通してであれ、持っていたならば、それをエピソードとして出したのではないか、とも思える。逆に言うとそうしたエピソードがないということは、面識や書面での交流はなく、レイサムがラスクの著作を読む、という一方通行だったのではないかと思われるのである。

レイサムがラスクの著作から受けた影響といえば、やはり、ラスクの『アングロ・サクソン文法』をまずあげるべきであろう。1830年代のイギリスにおける英語研究に大きな影響を与えた書物であり、英語訳が出たこともあって、レイサムも当然「著述家への呼びかけ」でも引用していた。

ただし、「著述家への呼びかけ」の執筆にあたって、レイサムがより具体的に影響を受けたのは、ラスクの別の二つの論考であった。レイサムは巻末の注で、この点を明記している。この論

考のなかで提案したアルファベットおよび正書法改良システムについて、「言語学の巨人、故ラスムス・ラスクの最後の二つの著作に多くを負っていることを隠しておくことは、不公正であろう」(Latham 1834b, p.50) というのだ。

一つはラスクの「十の歯擦音に関する考察」であった。これについて、レイサムは「著述家への呼びかけ」を出す前にすでに、ラテン語で書かれた原文を英語に訳し、自らのコメントをつけて、注釈つきの英語訳を作って出版していた。「ラスクの歯擦音に関する考察とグルジア語、アルメニア語で書かれた著作をヨーロッパの文字を使って転写する方法の概要：コメント付」という題の小冊子がケンブリッジから出版されたのである。内容はラスクの論考を翻訳して二分の一程度の長さに要約したもの (Latham 1834a, pp.1-11) と、それに対するレイサムのコメント (Latham 1834a, pp.12-18) からなっている。レイサムはラテン語テキストの一部を「著述家への呼びかけ」の表紙に引用してもいる。ラスクの「十の歯擦音に関する考察」からレイサムが具体的に受けた影響は、言語の持つ音の数だけ記号を用意する必要があるという考え方であった (Latham 1834b, pp.49-50)。

レイサムが「著述家への呼びかけ」で直接影響を認めているラスクのもうひとつの著作は、『デンマーク人のための英語文法』であった。ここからは、英語の音を表す方法を学んで、「著述家への呼びかけ」で示した表記体系の基礎としたというのである。一方、レイサムは、ラスクが1926年に著した、デンマーク語の正書法に関する論考は、読んでいないと述べていた (Latham 1834b, pp.49-50)。

結局のところ、このように見てみると、レイサムは「一音一字の原則」という、表音式綴り字にとって、重要な原理をラスクの「十の歯擦音に関する考察」から学び、またその原理の英語への具体的な適用方法を、ラスクの『デンマーク人のための英語文法』から学んだことになる。音声言語の文字表記について、また綴り字改革についての大原則を、ラスクから学んだと言っているともいえるのである。

なお「著述家への呼びかけ」でレイサムは、全体的な枠組みだけでなく、本文中の細部の議論においても、ラスクの論考に何度も言及した。たとえば、歯擦音に関する論考 (Latham 1834b, p.8)、ラップ語文法論 (p.17)、アングロ・サクソン文法論 (p.18) などである。必ずしも全面的に同意しているわけではなく批判も加えており、ラスクは二重字の本質を知らなかったのではないか (p.50) といった評価まで下している。ただ、それでも、綴り字改革論の本質的な枠組みを、ラスクに負っていることに変わりはない。

【使用された改良綴り字】

「著述家への呼びかけ」の本文は、改良綴り字で書かれている。冒頭の一節を見てみよう。

The obskurest individual amongst you, as well as the most celebrated, works ekwalli, though in a different degree, towards the produktion of what may be kalled the literature of the age

we live. I think it heyhli probabl, that in deskreybing the modes of thought of the neynteenth century, some future historian may ekspress himself in frases leyk the following.

用いられている綴り字の特徴は、/k/の音を表す<c>は用いずに、<k>で綴る (<obskurest>, <deskreybing>, <produktion>, <ekspress>, <kalled>), <qu>は<kw>とする (<ekwalli>), <x>は<ks>とする (<ekspress>), /ai/は<ey>とする (<neynteenth>, <heyhli>, <deskreybing>, <leyk>), /i/を表す<y>は<i>とする (<ekwalli>, 語尾の黙字の<e>は省く (<probabl>), というものである。新しい文字, 記号は使われておらず, 表記の読解自体に大きな困難は感じない。たとえばピットマンのフォノタイプなどよりもはるかに読みやすい。

しかし, 奇妙なことに, この論考のなかでは, ここで用いられている綴り字について, 誰が考案したどういう趣旨のものかについて説明は全くなかった。綴り字自体も, 論考の内容を正確に反映したものでもない。読者は, 自然な反応として, レイサム自身の考案によると考えるかもしれない。が, 実際はそうではなかったのである。

この綴り字法について, レイサムは30年以上経ってから著した論考のなかで述懐している。それによると, レイサムが用いたのは, 1840年代にロンドンで刊行された学術雑誌『クラシカル・ミュージアム』(*The Classical Museum: A Journal of Philology, and of Ancient History and Literature*)の一部の論考で用いられている綴り字改革案を拡大したものであるという (Latham 1872, pp.4-5)。レイサムは, この綴り字システムは「著名な編集委員のひとりが提案した綴り字案」(p.4)であるが, 「しばらく使用されたあとで, 高名な提唱者によっても使用が中止された」(p.5)と述べるにとどまり, 提唱者の具体名は挙げていない。

『クラシカル・ミュージアム』は, イギリスに帰化したドイツ生まれの古典学者シュミッツ・レオンハート (Schmitz Leonhard, 1807-1890) が1844年に創刊し, 1850年までに合計7号を出したのち廃刊となった, 古典研究の学術雑誌であった。編集委員のなかには, プロイセンの駐英大使カール・ブンゼン (Christian Karl Josias von Bunsen, 1791-1860) の名前もある。人文学における英独の交流のかなめとなっていたブンゼンは, 宣教団体のための表音アルファベット制定にも尽力していた。ブンゼンらに関わっていた雑誌で, 部分的であれ改良綴り字が採択されていたことは興味深い。1840年の前半の学術雑誌でこのような試みがなされていたことは, 特筆に価するであろう。

もっとも, 気になるのはレイサムの「著述家への呼びかけ」が出版された1834年と, レオンハートの『クラシカル・ミュージアム』刊行には, 10年という時間差があることである。またレイサムが「拡大した」というなら, 『クラシカル・ミュージアム』創刊以前にもこの改革案がどこかで用いられていたことになる。詳細は不明であるが, ここでは, レイサムが1834年の綴り字改革論で用いた表音式綴り字が, 彼自身の考案によるものではなく, 当時の他の学術出版においても少数であれ用いられた可能性があることを指摘しておきたい。

【影響力】

それでは、レイサムが1834年の綴り字改革論「著述家への呼びかけ」は、実際に、綴り字改革論として影響力を持ったのだろうか。この問いに答えるには、何を持って影響力とするか、を明確にする必要がある。

一般的に広く読まれ、提案する綴り字システムが受け入れられたかどうか、という意味ならば、「著述家への呼びかけ」の影響力はほとんどなかったといってよい。後に1872年に書いた別の綴り字改革論のなかで、レイサムは、「著述家への呼びかけ」や「ラスクの歯擦音論概要」について、「忘れられた著作」であり「死産で生まれた無垢な子」であると呼び、「著述家への呼びかけ」も「ラスクの歯擦音論概要」も、自分が直接知る限りでは1冊ずつ売れたことがわかっているのみだ、と報告している (Latham 1872, p.6)。

なお、筆者が今回2006年に調査したところでは、1834年の「著述家への呼びかけ」はオックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵、また「ラスクの歯擦音論概要」の小冊子はケンブリッジ大学図書館所蔵が確認できたが、いずれも、ブリテイッシュ・ライブラリーでの所蔵は確認できなかった。もちろん、現在の図書館所蔵状況が、出版当時の流通状況を直接反映しているわけではなく、また小冊子という形態ゆえの保存しにくさも考慮に入れなければならない。ただそれを考えにいれても、版を重ねたレイサムの後の著作に比べて、この小冊子は、発行部数も読者も少なかったことがうかがえる。また、ケンブリッジ大学図書館所蔵の「ラスクの歯擦音概要」は、筆者が手にするまで頁さえ切っていなかったもので、ほとんど関心を持つ人がいなかったことを物語っている。

しかしながら、大量の部数が印刷され、多くの読者の手に取られることだけが、論考や小冊子の影響力のバロメーターではない。レイサムの「著述家への呼びかけ」は少なくとも一人の学者が正書法の問題に関心を持つきっかけとなった。そしてその学者の論考、活動は、19世紀の英語綴り字改革運動を推進する大きな原動力となったのである。その学者とは「綴り字改革の長老」とも呼ばれるようになったアレグザンダー・ジョン・エリスであった。エリスは、1840年代にはアイザック・ピットマンと共同でフォノタイプを改良し、雑誌『フォネティック・ニュース』を発行した。1870年代から1880年代初めには言語学会、技芸協会での綴り字改革運動で精力的に活動した音声学者である。

レイサムからエリスへ、というこの影響関係は、エリスとピットマンが合作した「1847年版フォノタイプ」を音声学史の視点から論じたJ. ケリーが指摘したものである。ケリーによれば、エリスが綴り字改革に興味を持つようになったきっかけは二つあった。ひとつはレイサムの正書法に関する小冊子を読んだこと、またもう一つは、大学卒業後、イタリアを旅している間に多様な地域方言の発音を聞き、これを書き留める表記方法を考案しようと考えたことである (Kelly 1981, p.253)。

エリスが、レイサムの綴り字改革に関する小冊子を読んだと説明している記述に注目したケリーは、それが1834年のこの論考であることはほぼ確実であるとしている。確かに、エリスは

1833年から1837年までケンブリッジ大学で学んでおり、この時期レイサムもケンブリッジにいた。エリスはレイサムのいたキングズ・カレッジではなく、トリニティ・カレッジで数学を専攻していたとはいえ、イートン校同窓生同士何らかの交流があったのかもしれないし、また個人的面識は無くとも小冊子を目にする機会があったとしても不思議ではなかった。

1.3 「表音式綴り字の原則」(1859)

ロバート・ゴードン・レイサム著「著述家への呼びかけ」の抄録である、という注記を添えて、「表音式綴り字の原則」という論考が、1859年7月、アイザック・ピットマンの編集・発行する雑誌『フォネティック・ジャーナル』に掲載された。1859年といえ、[著述家への呼びかけ]の出版から四半世紀も経った後のことである。

この間のレイサムの経歴について記しておこう。1839年、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンの英語英文学教授となったレイサムは、1841年に『英語』を著した。これは、第2版が1848年、第3版が1850年、第4版1855年、第5版1862年と版を重ね、教科書としても広く読まれた。レイサムはまた他にも同様の英語に関する概説書を、少しずつ異なる読者層用の教科書として書いた。たとえば、1849年には古典語学校用の教科書と、女子校用の教科書を著し、1850年には商業学校用の教科書、1851年に大学生用の別の教科書を著している。

なお、ユニヴァーシティ・カレッジで教壇に立つ傍ら、医学を修めたレイサムは、1845年に英語英文学教授を辞す。一方で、1844年からロンドンのミドルセックス病院に内科医として勤務し法医学を講じたが、ただ、実際に医療に従事したのは1848年までと短い。

この時期にレイサムが書いた民族学における代表的な著作として、1850年の『人類の変種の自然史』がある。1852年のロンドン万国博覧会で自然誌の一部門として民族学展示を監修したときには、詳しいハンドブックを執筆し刊行した (Latham 1854)。

【「著述家への呼びかけ」の縮約版】

1859年7月に、『フォネティック・ジャーナル』に「表音式綴り字の原則」が掲載されたときには、ロバート・レイサムは、既に多くの英語史・英文法や、言語学、民族学の著書を持つ著名な学者であった。レイサムは1834年の「著述家への呼びかけ」以後、綴り字改革を直接、主題として取り上げた論考は書いていなかったが、この空白期間についてレイサムは後に、「最初から最後まで、この主題が私の心を離れたことは稀であった。それゆえ、私よりももっと勇気のある他の人々がこの間に達成してきたことを、関心を持って見守ってきた」(Latham 1872, p.3)と振り返っている。『フォネティック・ジャーナル』を編集、発行していたアイザック・ピットマンもそうした「もっと勇気のある人々」の一人であった。

ピットマンとレイサムが綴り字改革論を通じて接点を持ったのは、1859年の論考の雑誌掲載が初めてのことはない。1857年に、ウォルター・トレヴェリアン (Sir Walter Trevelyan, 1797-1879) が、表音式綴り字による綴り字改革についての懸賞論文を募集したときに、レイサムは審

査員の一人として招かれた。そして、同様に参加したなかに、アイザック・ピットマンの姿もあったのである。なお、このときの審査員には他にレイサムの「著述家への呼びかけ」に影響を受けた人物として先に言及したエリスや、後に印欧語の起源に関してレイサムが、学説的に対立することになる比較言語学者フリードリヒ・マックス・ミュラー (Friedrich Max Müller, 1823-1900) もいた。

さて、レイサム自身は、「表音式綴り字の原則」は「著述家への呼びかけ」の再版であると考えていた (Latham 1872, p.6)。また、後にレイサムの業績を論じたクワークも、1834年の「著述家への呼びかけ」を論じる際に、1859年の縮約版から引用し、論を進めている。このように、基本的には、両者は同じ論考の別の版と考えて差し支えないのであろうか。この問いについて、筆者は今回、1834年版と1859年版を比較し、異同を調査した結果から、否と答えたい。なお、本論で「1859年版」として言及しているものは、雑誌『フォネティック・ジャーナル』に掲載されたあと、小冊子として印刷もされた。本論での引用は小冊子版から行っているが、こちらには日付がないため「Latham n.d.」という形で言及している。ブリティッシュ・ライブラリーのカタログでは、出版年を「1868?」と推測しているが、この判断の根拠も明らかではないので、採用は控えた。

19世紀の綴り字改革の流れという視点から考えるならば、やはり、1834年の「著述家への呼びかけ」と1859年の「表音式綴り字の原則」の間の違いには、意味があると筆者は考える。というのも、1859年の縮約版で削除された箇所は、1834年版の綴り字改革論としての大きな特徴とも言うべき箇所だからである。インド・ヨーロッパ語族の他言語や、その他の言語への言及、および比較言語学者ラスムス・ラスクの論考への言及がそれにあたる。また、レイサムが提唱している表記法の説明箇所は (Latham 1834b, pp.11-13)、削除されて、ピットマンの提案に置き換えられた (Latham n.d. pp.5-6)。さらに、本文の表記法がレイサムの元々選んでいた表音式綴り字から、ピットマンのフォノタイプに変わったことも、1859年の「縮約版」が、単なる縮約版以上の意味を持つことを示している。具体的に見ていこう。

まず、確認しておかなければならないのは、1859年版の編集を主体的に行ったのが、著者のレイサムではなくて、掲載誌編集者のピットマンであったということである。これを示しているのは「表音式綴り字の原則」の冒頭にある「著者の許可を得て縮約、編集した」という注だけではない。本文中に挿入されている編集者注の存在も大きい。そこでは突然、「レイサム博士」の母音表記案に「私たち」(=編集者)は同意できない旨が語られ、雑誌としての代案が示されるのである (Latham n.d., p.5)。

「表音式綴り字の原則」の本文は、「著述家への呼びかけ」の二分の一程度の長さになっている。本文を縮約するにあたっては、文の書き換えはほとんど行われておらず、基本的には数段落、数ページをまとめて削除する方法が取られた。主な削除箇所は、次の二点に分類される。第一点は、他言語への言及箇所であり、第二点は、ラスクへの言及箇所である。順に見ていこう。

まず、第一に、量的に一番多く削除されたのは、英語以外の表記や音について言及した箇所

あった。例えば「著述家への呼びかけ」の19ページの初めから23ページ第二段落終わりまでが「表音式綴り字の原則」では削除された。この箇所ではレイサムはまず、現代英語の母音字 <a>, <e>, <o>, <i>, <u> とそれぞれの表している音を論じているのだが、その際にデンマーク語やノルウェー語、スウェーデン語 (Latham 1834b, p.19), フランス語, ギリシャ語, スラブ諸語 (pp.20-21) での文字と音との対応関係が言及されている。続いて二重字の <th>, <ch>, <sh> を論じる段では、さらにマルタ語, ヘブライ語, ポルトガル語, イリュリア語, ラップ語 (p.22) の例も言及している。

前述のように、1834年の「著述家への呼びかけ」で言及されている多様な言語の例は、系統立って説明されているわけではなく、また、英語と何らかの対応関係があるわけでもない。それぞれの例が独立して紹介されるのみで、論考全体にとって不可欠な事例というわけではない。1834年の「著述家への呼びかけ」にあっては、当時のレイサムの比較言語学的関心を示し、多言語に通じた博識をうかがわせる材料であったのだろうが、1859年の「縮約版」では、最も重要な部分ではないとみなされたようである。「著述家への呼びかけ」の28ページから30ページまでの語源と綴り字に関する議論が削除されたのも同様の理由であろう。また33ページから45ページまでの古英語の綴り字を中心に据えた議論も、ゲルマン語派の他言語（ドイツ語, デンマーク語, スウェーデン語, ノルウェー語, アイスランド語, ゴート語など）との比較や、英語の発展に関係の深かったフランス語, ラテン語, ギリシャ語の例が多数上げられているが、現代英語の正書法改革と関連はほとんどないという判断からか、縮約版では削除されている。

次に第二点として、注目すべきなのは、「著述家への呼びかけ」のなかで4箇所にわたっていたラスクへの言及が、縮約版では全て削除されたことであった。第一に、インド語族の言語における氣息音の扱いを論じるときに、ラスクの齒擦音に関する議論をレイサムが批判的に取り上げた箇所 (Latham 1834, p.8) が削除されている。対応する脚注も削られた結果、ラスクの齒擦音論を紹介したレイサム自身の論考への言及もなくなっている。第二の削除箇所は、レイサムが <ll> のように子音字が連続して用いられる場合の音について論じた箇所である。ここでは、ラスクの『ラップ語文法』の一節の英訳が、批判的な文脈で引用されていた (pp.16-17)。第三の該当箇所は、ラスクの『アングロ・サクソン文法』のソープによる英訳版から数行が引用され、レイサムが批判的なコメントを加えているところである。これはアングロ・サクソン文法自体にかかわることではなく、その記述における用語 (accentuation という語) の使用について述べたところである (p.18)。第四の削除箇所は、巻末注で、ラスクから受けた影響を明記し、特にラスクの齒擦音に関する論考とデンマーク人向けの英文法書から影響を受けたと、具体的に説明した箇所である。

このように、1834年の「著述家への呼びかけ」で、ラスクに言及していた4箇所全てを削除することで、「著述家への呼びかけ」に色濃く見られたラスムス・ラスクの影は、「表音式綴り字の原則」では全く痕跡がなくなった。レイサムがラスクから受けた影響も、また、その影響の裏返しのようにして表していた批判も、姿を消したのである。

アイザック・ピットマンは、レイサムの「著述家への呼びかけ」を編集するにあたって、ラスクへの言及が重要であるとは考えなかったのであろうか。おそらく、1850年代末のイングランドの英語綴り字改革運動にとって、25年以上前に亡くなったデンマークの比較言語学者の議論は、本質的な部分であるとは思われなかったのであろう。そもそもピットマン自身の英語綴り字改革論のなかには、この種の比較言語学的考察が出てくることはほとんどないのである。

ピットマンが「著述家への呼びかけ」に加えた変更は、内容的なものだけではなく、表記も変更されたのである。先に見たように、「著述家への呼びかけ」で用いられていたのは、当時ケンブリッジの他の媒体でも一部用いられていたと考えられる、新字を用いない綴り字システムであった。しかし「表音式綴り字の原則」ではこれを全く用いず、主として通常の綴り字を用いていた。そして、本文最後の3ページだけを、「表音式綴り字の見本」としてピットマンの考案したフォノタイプー表記で記したのである (Latham n.d. pp.14-6)。この箇所は特に内容的な観点から選ばれたわけではなく、本文の記述の一部が、機械的に選ばれただけのようである。

レイサム自身は、後に1872年の綴り字改革論のなかで、自分としては推奨する特定の改革案は持っていないと繰り返し述べている (Latham 1872, p.3)。おそらく1859年の時点でも同様の考え方だったのだろう。論考の大半が現行正書法で書かれ、一部にフォノタイプーが用いられるというのは、当時の『フォネティック・ジャーナル』の編集方針に沿ったものであった。レイサムにはこれに反対する特段の理由もなかったのであろう。

以上詳しく見てきたように、1859年に『フォネティック・ジャーナル』に発表された「表音式綴り字の原則」は、1834年のレイサムの「著述家への呼びかけ」の抄録だということになってはいるものの、その編集の過程で、アイザック・ピットマンが、自らの綴り字改革論に合致するように内容および表記を変えたものであった。特に顕著であったのが、1834年の論考で随所に現れていた、レイサムがラスクから受けた影響が、1859年の縮約版では、見事なまでに消去されていたことであった。両者の比較によって、「著述家への呼びかけ」の特徴が浮かび上がるとともに、ピットマンの目指していた綴り字改革の方向性も照らし出されると考えるものである。

1.4 『表音式綴り字の擁護論』(1872)

1872年、レイサムはピットマン社から『英語アルファベットと正書法の歴史からみた表音式綴り字の擁護論 欠陥の修正法つき』(A Defence of Phonetic Spelling, drawn from a history of the English Alphabet and Orthography, with a remedy for their defects, 以下『表音式綴り字の擁護論』と略す) という本を出版した。まず、前回の1859年の「表音式綴り字の原則」以降のレイサムの著作活動および伝記的事実を確認しておこう。

【1860年代以降の著作】

1862年に『比較言語学原理』が出版された。これは、800ページ近い大著で、インド・ヨーロッパ語族以外のアジア、アメリカ、アフリカの言語の記述に多くのページが割かれている。レイ

サムは、1842年に設立された言語学会の初回例会で「オーストラリアおよびアジアの島々に点在するパプア人ないしはネグリティ人の諸方言について」を発表して以来、言語学会においてこうしたヨーロッパ外の言語について扱う数少ない会員の一人であり、1858年までの間に二十回以上の発表をしていた(Quirk 1974, p.84, Aarsleff 1983, p.222)。

なお、この『比較言語学原理』で、アーリア人の故郷について、レイサムはヨーロッパ説を唱えた。当時主流であったアジア起源説に異を唱えたレイサムを支持する人は少なく、この説はレイサムの知的権威を大きく失墜させることになったという。このことだけが原因というわけではないだろうが、1860年代以降のレイサムについて、伝記類はあまりよい記述をしていない。経済的に困窮して、100ポンドの王室費年金の給付を受けたことや、1860年代のレイサムは、顔立ちは整っているのにもかかわらず清潔な身だしなみが維持できていなかったというようなことを、『国民伝記辞典』は伝えている。

レイサムの最後の大きな仕事は、1866年から1870年にかけて行った、サミュエル・ジョンソンの『英語辞典』の大幅改訂であった。1755年に初版が出たこの辞書は、1818年に、H.J.トッド(H.J.Todd)が最初の改訂版を完成させている。レイサムの版はトッドの4巻からなる版にさらに改訂を行ったものであった。当時は、すでに言語学会の大辞典(のちの『オックスフォード英語辞典』)の編纂が進んでおり、その大辞典編纂で中心的役割を果たした一人のフレデリック・ファーニヴァル(Frederick James Furnivall, 1825-1919)などは、レイサムの改訂版ジョンソン辞典について、かなり厳しい批評を寄せている(グリーン 1999, p.444)。このほか、追悼文を書いたワッツも、この辞書改訂について、失敗だったと厳しい評価をしている。明らかに、レイサムの全盛期は過ぎ去っていたのである。

本項で扱う『表音式綴り字の擁護論』(1872)は、ジョンソンの辞書改訂が終わった後の仕事であった。綴り字改革についていうならば、このあとレイサムは、1877年の綴り字改革公開会議の主催者一覧にも名前を連ねているものの、1878年1月の請願書提出時には同席しなかったようである。さらに、1879年に設立された英語綴り字改革協会には、関わっていなかったようで、関連資料に名前が見られない。また、英語綴り字改革協会の月刊誌『スペリング・リフォーマー』の1880年8月号に、綴り字改革参考文献一覧が掲載されたときに、レイサムの著作が一点も挙がっていないことも、この協会とレイサムの関わりがないか、極めて薄いことを示唆していた(*Spelling Reformer*, Vol.1, No.2, pp.28-31, 1888)。晩年のレイサムは、失語症を患い、公的な場では姿が見られなくなっていたという。

【表音式綴り字の擁護論】

「著述家への呼びかけ」(1843)や、「表音式綴り字の原則」(1859)が、小冊子、雑誌記事という体裁だったのに比べて、この『表音式綴り字の擁護論』は、142ページの書物の形になっている。この本を執筆するあいだ、レイサムはピットマンの住むバースに滞在していた(Baker 1980, p.378)。

書名には、「英語アルファベットと正書法の歴史からみた表音式綴り字の擁護論」とあるが、議論の中心は、綴り字法よりもアルファベットにあった。英語で用いるアルファベットの歴史に、特に多くの頁が割かれている。レイサムは、フェニキア文字まで遡って、そこから派生した種々のアルファベットの歴史、分類と特徴を説明している（第12節から第25節まで、pp.29-51）。英語については、ローマン・アルファベットを用いるようになったことで生じた問題点を、CとKを中心に詳述した（第26節から第31節まで、pp.52-84）。振り返ってみるならば、1834年の「著述家への呼びかけ」のときから、レイサムは正書法だけではなくて、アルファベット自体に関心を示していた。また、民族学的な関心を持ちながら比較言語学を考えるなかで、様々な言語の多様な文字、アルファベットへの関心を、さらに強くしたのかもしれない。

もっとも、アルファベット論が中心だとはいうものの、レイサムには、専門的に詳しいアルファベット論、「アルファベットの博物誌のようなもの」（p.29）を書くつもりはなかった。『表音式綴り字の擁護論』には、索引も参考文献一覧もない。研究書としてではなく、一般読者を対象にした綴り字改革論の書物として書かれているのである。

このことは、たとえば、やや時代が下って1883年に出版された、この時代の代表的なアルファベット論、アイザック・テイラーの『アルファベット：文字の起源と発達』（Isaac Taylor, *The Alphabet: An Account of the Origin and Development of Letters.*）と、レイサムの『表音式綴り字の擁護論』を比較してみても、明らかである。テイラーの二巻本の書物は今日、「科学的な視点から書記体系 writing について書かれた最初の書物」（Daniels 1996, p.6）と見なされている研究書である。

たとえば、レイサムは、アルファベットの歴史を語るのにフェニキア文字から始めていた。古代エジプトのヒエログリフは、中国の漢字と同様、フェニキア文字以降のアルファベットとは、無関係なものだということである（Latham 1872, p.33）。テイラーの、より詳しい議論によれば、これは、1850年代には極めて一般的な考え方であった。たとえば、1853年出版の『ブリタニカ百科事典』第8版にも、「エジプトのヒエログリフにも、中国の漢字にも、音節文字にも、アルファベットの発明に結びつくような手がかりは何も見られない」（Taylor 1883, p.87）と記述されているのである。しかし、その後、1859年のフランスのエジプト学者エマヌエル・ド・ローグによって、フェニキア文字とヒエログリフの関連が論証された、とテイラーはいう（Taylor 1883, p.89）。そして、彼自身は、ヒエログリフとフェニキア文字のつながりを重視する立場を取るものであった。

フェニキア文字とヒエログリフの関係に関しては、この後も議論は続き、現在に至るまで、歴史的、発展段階的な関係は、完全には証明されていない（Daniels 1996, p.90）。ただ、ここで指摘しておきたいことは、レイサムのアルファベット論が、同時代の学界最前線の議論のような精緻な論ではなかったということである。むしろ、綴り字改革に関心を持つ人々に、アルファベットについて、わかりやすく説明することを目的としたものだったようである。

なお、『表音式綴り字の擁護論』というタイトルのこの本において、レイサムは、独自の表音

式綴り字案を提案しているわけではない。そうではなくて、論考の最後 (pp.138-142) で、ピットマンの考案したフォノタイプを推奨しているのみなのである。ピットマンのフォノタイプは、綴り字自体もさることながら、新字を加えてアルファベットを拡大することが大きな特徴である。『表音式綴り字の擁護論』で、レイサムがアルファベット論に紙幅の大半を割き、最後に、ピットマンの考案した表音式アルファベットの一覧表を示し、また、それを用いた例文を示したのは、論の進め方として矛盾したものではない。こうした構成は、レイサム自身が、あくまでも綴り字改革の理論的、抽象的な議論に一義的な関心を持っており、具体的な表音式綴り字案や、新しいアルファベットを提唱することには関心がなかったことを、反映したものであった。

さて、以上1節2項から1節4項までは、綴り字改革についてのレイサムの三つの論考について、ひとつずつ取り上げて、その内容と背景を説明してきた。次に1節5項と6項では、こうしたレイサムの綴り字改革論が、19世紀イギリスにおける言語研究の関心のあり方、発展の方向性と、どのように関わっているかを考えてみたい。まず1節5項では、綴り字改革論者であるという立場と、英語史・英文法概説書著者という立場が、どのように両立し得たのかを考える。そして最後に1節6項では、そもそも、なぜレイサムは綴り字改革論を支持したのかという点について、翻字・音声表記という視点から考察する。

1.5 『英語』と綴り字改革論

【『英語』と綴り字改革論】

レイサムの名前は、英語史・英文法の概説書である『英語』の著者として、最もよく知られていた。『英語』は、1841年に初版が出て、その後、1870年代まで、一番標準的な英語概説書として教科書としても広く用いられた。また、『英語』が版を重ねただけでなく、この本を原型として、若干の修正を加えた教科書も何種類も出版されたことは、前に述べたとおりである。

レイサムの業績や社会的評価のなかで、こうした英語史・英文法書執筆のほうが、綴り字改革論よりも、はるかに大きな位置を占めることはいままでのない。では、こうした英語史・英語文法の概論記述をするにあたって、レイサムは、綴り字についてはどのような記述を行っていたのだろうか。綴り字改革論は、こうした英語概説書においても主張されたのだろうか。この点について考えてみよう。

まず、『英語』のなかで綴り字に関する記述がどのような形で行われているのか、詳しくみてみることにしよう。なお、筆者が実際に参照したのは、1850年発行の第3版である。この版では、本文が改訂されており、また、序文は第2版(1848)のものが再掲されている。

600ページ余りのこの大部の書物は、序文のあと、7部構成となっている。第1部「英語の一般民族学的関係」、第2部「英語の歴史と分析」、第3部「音、文字、綴り」、第4部「語源」、第5部「統語」、第6部「韻律」、第7部「英語の方言」である。このなかで綴り字の問題が扱われるのは、第3部「音、文字、発音、綴り字」のなかの全10章においてであった。中でも、特に

綴り字改革論と直接関係があるのは、正音法 (orthoepy) について述べた第8章、正書法 (orthography) について述べた第9章、そして、英語のアルファベットの歴史について述べた第10章においてである。

実は、『英語』においてレイサム第8章の正音法についての議論と、第9章の正書法 (綴り) についての議論は、自家撞着に陥っている。両者についてのレイサムの定義、つまり「正音法は語の正しい発音を決定し、言語が話される様態を扱う。一方、正書法は語の正しい綴り方を決定し、言語が書かれる様態を扱う」(Latham 1850, p.178) という定義自体は、極妥当なものである。問題なのは、両者の関係であった。

まず第8章で、正音法を定める基準として、レイサムは「書き言葉の権威」を重視した。標準的な発音の根拠を綴り字に求めようというのである。この主張にたどりつくまでに、レイサムは、他の方法で標準的な発音を決定することが困難であることを説明している (pp.175-6)。第一に、学者の権威による標準発音の決定という可能性があるものの、古典語学者が古典語の知識をもって英語の発音を決められる範囲には限界があるので、難しい。第二に、法曹界、教会のような高いレベルの教育を受けた人々の実際の英語使用を根拠とした標準発音を指定する可能性があるが、最終的には個人個人の発音に帰着するので、それらの個人の音が出身地方の発音を含んでいる可能性もあり、また、その団体に属する個人のみが正しい音を決定できるというのも実際的でない。第三に、国語の監督を行うことを目的にした機関に、標準発音決定を任せる可能性があるが、こうした機関は、イタリアや他の多くの大陸諸国には見られるがイギリスでは設立されていなく、実現が難しい。と、このようにして、「書き言葉による権威」以外に、標準的な発音を決定する選択肢は、否定されるのである。

ところが、こうした第8章の議論に続く、第9章では、「正書法は正音法を前提にしている」という主張がなされている。「言語にとって、正書法は正音法ほど本質的に重要なものではない、すべての言語は話されるものだが、書き記される言語は数少ない」(p.178) という理由付けは、もっともではある。が、「正書法は正音法を前提にしている」という第9章の議論と、発音の根拠を綴り字に求めるとした第8章の議論とは自家撞着に陥っているのである。

具体例をひとつ挙げておこう。たとえば、第8章でレイサムは、<chemist> と <chymist> という綴りおよびそれらの発音について言及している。「綴り字が間違っているために、発音が間違えるような場合は、正音法上の誤りとはいえない、それは、正音法ではなく正書法上の誤りなのである」(p.173) という議論の例として、<chymist> と書かれているのに、<chemist> と書かれているかのように発音したり、またその逆を行ったりする例を挙げている。この語は19世紀末の『オックスフォード英語辞典』では、1790年頃には<chemist> が一般的になったものの、薬剤師、薬種商の意味では<chymist> も、通俗的に用いられていると記している。レイサムは、この二様の綴り字と二様の発音が、それぞれ一致しないときに、より根本的な間違いの原因を綴り字に求めているようである。ならば、次の段階として「適切な綴り方」を議論するのが当然の帰結ではないかとも思われるが、そこまでは踏み込まないのが、レイサムのここでの論述の姿勢であった。

これは「間違っ綴られているために発音を間違えう」例だ、と指摘しながらも、「適切な綴り方に関しては、私は意見を述べない」(p.173)というのである。結局、このままでは、「正しい発音」にも「正しい綴り字」にも辿りつけないことになる。

このような矛盾を抱えながらも、レイサムは、「正しい発音」と「正しい綴り字」が対応するような体系を、理想として求めていた。レイサムは、第9章で、英語のアルファベットに対する批判的な分析を展開している(pp.184-7)。一音一字対応のためには、文字数が足りないこと、音と文字の対応関係に首尾一貫性が欠けていること(/k/の音に対して<c>と<k>の文字)などを縷々説明するのである。「首尾一貫性のなさ」「誤り」「余剰」「不安定」といった、マイナスの価値評価を含んだ語が多用されている。

もっともレイサムは『英語』のなかで、英語アルファベットを批判するものの、そこからさらに踏み込んで、綴り字改革を唱導してはいなかった。唯一の具体的な改革の提案は、ギリシャ語表記の慣習のように、母音字に補助記号をつけて、短母音であるか長母音であるかを表す、というものであった(pp.187-8)。こうした記述の行間に、レイサムの表音的綴り字、綴り字改革への志向性を読み取ることは難しくない。ただ、これ以上は綴り字改革論へ傾斜しないのが、レイサムの立場であり、判断であったと言えよう。

こうした記述について、レイサムが綴り字改革論に通じる考え方を、意図的に、教科書的概説書に紛れ込ませたと解釈してみることも可能だろうか。筆者には、それは、レイサムを綴り字改革論者として位置づけようとするあまりに、踏み込みすぎた解釈であるように思える。この点については、同時代の同じような読者を対象にした英語概説書と比較してみると、レイサムの英語アルファベットや綴り字に関する考え方が特徴的であったことを指摘するにとどめたい。たとえば、1858年に初版が刊行され、何度も版を重ねるベストセラーとなった、シェネヴィクス・トレンチの『英語の過去と現在』が、第8章で、綴り字の問題を取り上げ、表音式綴り字や綴り字改革論者を強く批判、攻撃していることと、レイサムの論調は、極めて対照的である(cf. 山口2004, pp.78-9)。

【抽象理論のための英文法教育】

ところで、『英語』は、学校、大学で「英語」「英文法」を教える際の教科書、参考書として使われることが多かったが、英語のアルファベットや綴り字に対するこのような批判的な見解は、この書物が「英語」「英文法」の教科書として用いられることの妨げにはならなかったのだろうか。この問いに対して、少なくともレイサム自身ならば、はっきりと「否」と答えるだろう。というのも、レイサムは、「英語」「英文法」を教えることが、言語規範を教えることになるとは思っていなかったからである。

レイサムは、生徒や学生が、英語文法を学ぶことで、正しい言語使用、話し方や書き方における言語規範が学べるとは考えていなかった。彼が構想する「英文法」は、18世紀以降広く読まれ、書かれていたラウス、プリーストリー、リンドリー・マリーなどの著した規範文法とは、根

本的に異なっていたのである。レイサムは、文法教育は、礼儀作法教育として行うのではないと言い、礼儀作法の一環としての正しい話し方、正しい言語の使い方などは、実際の言語使用、習慣によってしか身に就かない、文法規則習得によってからは身につかないと考えた。

では、なぜ英語文法を学ぶ必要があるのだろうか。レイサムの答えは、文法を学ぶことは、理論を学ぶことに他ならないから、であった。そして理論を学ぶためには、その理論が議論の対象としている言語自体はできるだけ分かりやすいほうがいい、つまり、母語が一番いいというのである (Latham 1850, p.ix)。実際の言語使用のための文法教育ではなくて、より高次の目的、抽象的なための文法教育なのである。このレイサムの論理は、ギリシャ語やラテン語の学習を人格的陶冶の一環と位置づけたパブリック・スクールの考え方と奇妙な類似性を見せている。ただ、レイサムの英語文法教育の場合は、その背景にあったのは新しい言語学、つまり、レイサムが「現代言語学」(modern philology)、「批判的言語学」(critical philology)、「科学的言語学」(scientific philology)と呼ぶ、新しい言語学であった。レイサムは、より抽象的な理論的学問としての科学的言語学の存在を背景にして、その理論を学ぶための、個別言語として英語の文法を学ぶのだ、と記している。この点は、レイサムにとって、極めて重要な問題であったらしく、いろいろな機会に繰り返し述べている。たとえば、1854年にロイヤル・インスティテュートで、「言語の研究の重要性について」という講演をしたときにも、この主張を行っているほどだった (Lahtam 1855)。

そして、「英語」「英文法」を教科として学ぶことが、実際の言語使用における規範(規範文法や正しい綴り方)を学ぶためではなく、論理的思考力鍛錬のためだと考えられているのであれば、レイサムが、『英語』や類書のなかで、現行のアルファベットを批判したことも、理解できるのである。

1.6 翻字・音声表記と綴り字改革論

【「メタグラフィー」と綴り字改革論】

最後に、なぜ、綴り字改革論は、レイサムの関心を惹いたのかについて、考えたい。この問いは大きく、筆者が簡単に答えをだせるものではない。ここでは、『アシーニウム』にワッツが書いた追悼文の一節を手がかりにして、この問いに対する答えの可能性を探ってみよう。それは、「非ヨーロッパ言語のアルファベットに対して用いられるメタグラフィーの有用性を信じていたので、表音式綴り字を非常に早くから提唱した」(Watts 1888, p.340)という解釈である。

「メタグラフィー」(metagraphy)とは、当時もまた現在もあまり用いられない言葉で、通常は「トランスリテレーション」(transliteration, 翻字, 字訳)が使われる。いずれの語も、書記体系を持つある言語の書記素を、別の言語の書記体系で置き換えることを意味する。レイサムは、「メタグラフィー」は、自分の造語ではなく、1830年代にケンブリッジのある優秀な学者が提唱した語だと説明し、1872年の論考中では「メタグラフィーまたはトランスリテレーション」(Latham 1872, p.129)というように並列で用いている。『オックスフォード英語辞典』(第2版)

に「メタグラフィー」の用例として挙げられているのは、このレイサム の用法と、ワッツのレイサム追悼記事での用法のみであった。

レイサムが、特に「メタグラフィー」を「トランスリテレーション」よりも強く推奨するわけではないと言いながらも、敢えてこの語を用いるのは、1830年代に自らがケンブリッジで翻字(メタグラフィー、トランスリテレーション)や音声表記(トランスクリプション)についての論考を発表したときからの継続を、意識していたからかもしれない。レイサムは、1節2項で言及したように「著述家への呼びかけ」や「ラスクの歯擦音論概要」を1834年に発表したほか、翌1835年には「ギリシャ語と英語の文字によるギリシャ語文法」も著しており、1872年の『表音式綴り字の擁護論』のなかでは、この3本の論考をまとめて、表音式綴り字を扱った自身の先行研究、と位置づけている(Latham 1872, p.3)。

用いる用語がメタグラフィーであれ、トランスリテレーションであれ、レイサムにとって、ヨーロッパ以外の言語を、ローマン・アルファベットへ翻字表記することへの関心が、表音式綴り字への関心へ結びついたというワッツの指摘は興味深く、また、説得力がある。もちろん厳密な意味で問題にしなければならないのは、翻字(トランスリテレーション)だけではなくて、音声表記(トランスクリプション)も含まれるのだが、いずれにしても、他言語の書記体系と出会って、それをローマン・アルファベット化しようと、規則・体系を考えると、自らの母語である英語の綴り字体系にも、批判的な目を向けることになった、という道筋は理解に難くない。1862年の『比較言語学原理』に結実した、世界各地の言語に関する考察や、ヨーロッパ外の諸地域の文化についての民族学的・文化人類学的考察は、レイサムが、自国の言語の書記体系を相対的に見る視点を持つ大きな理由となったことだろう。

言うまでもないことだが、アジア・アフリカ・アメリカなどの言語の翻字や音声表記に関心がある人が皆、英語の綴り字改革論者になったわけではない。レイサムの場合は、そうだったという解釈である。

そして、レイサムのような関心のありかたを示すひとが、他にもいたことも、また、事実であった。たとえば、時代は少し下るが、オックスフォード大学比較言語学教授でサンスクリット学者のフリードリヒ・マックス・ミュラーは、他言語の音声表記に関心を持ち、綴り字改革も支持したひとりであった。また、同大学比較言語学教授代理のアッシリア学者のアーチボルド・セイス(Archibald Sayce, 1845-1933)は、別の視点から、他言語の書記体系研究に取り組んでおり、同時に、英語の綴り字改革運動でも、中心的役割を果たしていた。レイサムの綴り字改革論からは離れるが、順に、簡単に紹介しておきたい。

【マックス・ミュラーの場合】

フリードリヒ・マックス・ミュラーは、ドイツ人サンスクリット学者として、1840年代から、イギリスの東インド会社所蔵の「リグ・ヴェーダ」稿本を校訂し、オックスフォード大学出版から出版する事業に取り組んだ。出版が完了するのは1874年のことであるが、その間にも、1858

年から現代ヨーロッパ語の教授として、また1868年からは比較言語学の教授として、オックスフォード大学の教壇に立つようになった。

マックス・ミュラーは、「ミッシヨナリー・アルファベット」(Missionary Alphabet)という音声表記システムを、1854年に発表した。駐英プロイセン大使カール・ブンゼンが、ロンドンの邸宅で「アルファベット会議」(Alphabetic Conference)を開いたときに提案したもので、アジア、アフリカで宣教活動を行う際に、現地の言語(無文字言語またはローマン・アルファベット以外の文字を用いる言語)を表記する体系として、考案されたものである。なお、ブンゼンは先に1.2で言及した、1840年代の学術誌『クラシカル・ミュージアム』編集に携わっていたドイツの学者・外交官である。

「ミッシヨナリー・アルファベット」は、他言語の音声表記のための書記体系であって、英語綴り字改革案ではない。しかし、この後、マックス・ミュラーは英語綴り字改革運動にも関わるようになる。まず、1857年にウォルター・トレヴェリアンが懸賞金を出して、表音式綴り字改革案を公募したときには、マックス・ミュラーもレイサム、ピットマン、エリスと共に審査員を務めた。そして、1861年から1863年にかけて、ロイヤル・インスティテュートで行った一般向け講義をまとめて出版した『言語科学講義』(1864)のなかでは、ピットマンとエリスの綴り字改革運動を支持した(Müller 1864, pp.99-100)。これによって、マックス・ミュラーは、ピットマンを始めとするイギリスの綴り字改革運動家たちから、学問的権威として頼りにされるようになり、時には、その名前と肩書きが利用されるようになる。その結果、社会的にも表音式綴り字を支持する言語学者の代表のようにみなされるようになっていくのである(山口2004, pp.80-83)。1876年にマックス・ミュラーは、ピットマンからの再三の依頼に応じて、『フォートナイトリー・レビュー』に「綴り字について」という論考を著す。これは、1870年代後半から1880年代に最も勢いのあった綴り字改革運動のなかで、「オックスフォード大学のマックス・ミュラー比較言語学教授」の綴り字改革支持論として、非常に頻繁に引用されることになった。

さて、1854年の音声表記システム「ミッシヨナリー・アルファベット」考案と、その後の英語綴り字改革運動支持の間には、関連があるのだろうか。厳密な意味での因果関係を論証することは難しい。また、安易な推論は避けるべきであろう。マックス・ミュラーは、1860年にサンسكريット学教授ポスト就任に失敗したことが原因で、1860年代以降は、サンسكريットの学問的な研究活動よりも、比較言語学や比較神話学の一般的な著述活動に力を注いだと言われる(『国民伝記辞典』)。『言語科学講義』での綴り字改革運動支持も、そうした姿勢の表れのひとつだったのかもしれない。

ただ、ワッツがレイサムの追悼文のなかで用いた「非ヨーロッパ言語のアルファベットに対して用いられるメタグラフィーの有用性を信じていたので、表音式綴り字を非常に早くから提唱した」という論理は、マックス・ミュラーの音声表記システム考案と表音式綴り字改革支持との関係にも適用可能であろうということを、ここで指摘しておきたい。

【アーチボルド・セイスの場合】

アーチボルド・セイスは、アッシリア学を専門とする東洋学研究者であり、言語学者でもあった。1865年に入学したオックスフォード大学で、マックス・ミュラーにサンスクリットを学び、古典学部を最優秀の成績で卒業する。1876年にセイスは、オックスフォード大学比較言語学教授代理に就任し、1890年まで務めた。教授代理というのは、教授であるマックス・ミュラーが、1875年に実質的には引退したものの、大学の計らいによって、比較言語学教授ポストと給与を終身、保持するという特別な措置を受けたからであった。

セイスの綴り字改革への関わりは、主として1870年代後半から1880年代初めの、この運動が盛んであった時期に限られているものの、果たした役割は小さくはなかった。たとえば、1877年5月29日に、技芸協会の建物を借りて、ロンドン学務委員会の請願運動を支援するための、綴り字改革公開会議が開かれたときには、セイスが議長を務めた（山口2005, p.117）。また、この請願運動の結果として、1879年に英語綴り字改革協会が設立されたときには、セイスが会長となっている。1880年7月に、協会の月刊誌『スペリング・リフォーマー』が創刊されたときにはセイスも、「綴り字改革について」という記事を載せている。記事のなかでは「言語科学と音声学の研究者は、例外なく、綴り字改革唱道者である」とまで言っているのだ（“A Word on Spelling Reform,” *Spelling Reformer*, Vol.1. No.1, July 1880, pp.7-8）。

また、1880年に著した『言語科学入門』でも、綴り字改革の必要性に触れている（Sayce 1880, Voll, pp.328-334, Vol.2, pp.343-352）。特に第2巻（pp.344-5）では、同時代の英米の綴り字改革論者15人の代表的な論考一覧に加えて、ドイツでの綴り字改革についての文献情報も挙げており、本文の論述も充実している。またセイスは、科学的言語学の研究者にとっては、現行の英語綴り字は、「目障りなだけでなく、邪魔でもある。言語学者が知りたいのは、語がどのように綴られているかではなくて、語がどのように発音されているかなのである」（Vol.2, p.345）とも主張している。セイスは、明解な論理で、綴り字改革を支持した言語学者の一人であった。

セイスは、言語の書記体系、音と文字の対応関係について、自らの学問分野でも、専門的に取り組んでいた。音声表記システムや翻字システムの考案ではなく、古代文字の解読に取り組んでいたのである。そしてセイスは「象形文字ルウィ語」の解読に、大きな功績を果たした。この点についての詳しい議論は、本稿の射程を超え、筆者の手に余るものなので、ここでは、比較言語学者吉田和彦の説明を引用しておきたい。『言葉を復元する』のなかで吉田は、セイスについて次のように記している（吉田1996, pp.17-20）。

現在一般に「象形文字ルウィ語」と呼ばれている言語は、セイスの時代には、「象形文字ヒッタイト語」と呼ばれていた。この文字の解読について、「セイスは文字の数がアルファベットにしてはあまりにも多すぎることを見抜き、この象形文字は表意文字と表音文字からなっていると推定した。また、特定の文字が接辞として文法上の機能を担っていることや、「神」を著す表意文字（同時に、限定詞としても用いられる）ことを認定した」（吉田1996, p.19）。セイスの特に重要な功績は、楔形文字と象形文字が併用された「タルコンデモスの印章」の分析であった。な

お、この象形文字の解読について、セイスは、1870年代から1900年代に至るまで、いくつかの論考を著しているが、タルコンデモスの印章に刻まれた象形文字と楔形文字についての論文("The Bilingual Hittite and Cuneiform Inscription of Tarkondemos")は、1880年に発表されている(Daniels 1996, p.159)。

セイスの、タルコンデモスの印章の象形文字・楔形文字を分析した論考が発表された1880年という年は、綴り字改革支持を大きく謳った『言語科学入門』が出版された年であり、また『スベリング・リフォーマー』創刊号に「綴り字改革について」が載った年でもある。この一致は偶然に過ぎないかもしれない。しかしながら、敢えてここで、この出版年の一致を記すのは、当時の綴り字改革運動を支えていた言語学者たちが、表音式綴り字を高く評価し、その価値を説くときに、いったい他に何を考えていたのか、ということを示したいからである。彼らは単に、英語の綴り字体系だけを見ていたのではなかった。セイスの場合は、一方で、難解な象形文字ルウィ語の解読に取り組みながら、他方で、英語の綴り字については、合理的、規則的な表音式綴り字が理想的であると改革を提唱支持していたのである。

両者を貫いていたのは、単純な進化主義的、合理主義的の文字観、言語観だったのだろうか。つまり、象形文字から表音文字へと文字は進化しており、規則に従って音を表記する書記体系が最も優れているというような、考え方だったのだろうか。確かに、文字においても、言語においても、進化主義的な考え方が19世紀ヨーロッパで優勢であったことは否めない。ただ、そのような単純な文字観、言語観だけから、古代の象形文字、楔形文字に取り組む学問的野心と熱意が生まれるとは、考えにくい。むしろ、文字と言語について科学的に法則を探究するという、19世紀言語科学の精神が、あるときは象形文字解読として結実し、またあるときは、翻字・音声表記システムの考案となり、そして、英語綴り字改革論へ向かうときもあった、と考えられるのではないだろうか。

本節の主題である、ロバート・レイサムの綴り字改革論に立ち戻るならば、比較言語学を応用した綴り字改革論を構想したこと、そして表音式綴り字を支持したことは、「抽象理論のための英文法」を説いたこと、アジア・アフリカ・アメリカの言語についてローマン・アルファベットで表記をして考察したことと並んで、いずれも、19世紀的言語科学の特徴を体現したものであったと言えるだろう。

第2節 ヘンリー・スウィートの綴り字改革論

2.1 音声学者ヘンリー・スウィート

【本節の目的と構成】

19世紀後半のイギリスを代表する音声学者・英語学者ヘンリー・スウィートは、1845年に生まれ、1912年に亡くなった。第一節でとりあげたロバート・レイサムとは、生年に33年の開きがあり、レイサムがユニヴァーシティ・カレッジの英語英文学教授の職を辞した年に生まれたこ

とになる。スウィートは、特に音声学研究と古英語研究の分野で、大きな学問的貢献を果たしたが、英文法、比較言語学などでの論考も多い。「真に学術的な英語学の建設者」(佐々木・木原 1995, p.341)ともいわれ、イギリスの言語学史研究を主題とする中心的な学会は、「ヘンリー・スウィート協会」と呼ばれているほどである。

スウィートも、レイサムと同様に、初期にデンマークの比較言語学者ラスムス・ラスクの影響を強く受けた。スウィートはラスクの『アングロ・サクソン文法』を読んで、英語研究、ゲルマン語研究、比較言語学への関心を抱くようになり、また、ラスクのデンマーク語正書法改革に関する論考を読んで、英語の綴り字の問題点およびその改革を考えるようになった(Wrenn 1946, p.179)。ラスクから受けた影響は、十代の終わりにハイデルベルク大学に留学して、比較言語学およびゲルマン言語学を学んだことや、帰国後ロンドンで、メルヴィル・ベルの音声学の授業を受け、ベルの『ヴィジブル・スピーチ』(Visible Speech)を読んだことと共に、スウィートの学問にとって、重要な基盤を作ることとなった。

さて、スウィートは、1870年代後半から1880年代半ばまでの間、綴り字改革に関する論考を発表し、綴り字改革運動に積極的に関わっていた。特に、会長を務めたこともある言語学会では、1880年から1881年にかけて行われた「英語綴り字の部分的修正」案の作成あたって、中心的な役割を果たし、その宣伝、普及にも尽力した。本節では、言語学者・音声学学者であるスウィートがどのような綴り字改革論を著したのか、内容を紹介し、その背景を考察する。

なお、スウィートについては、音声学や英語学(英文法、英語史)での貢献について、これまでも研究が蓄積されている。本節で、綴り字改革論に焦点をあててスウィートを論じるのは、これまで明らかにされてきたスウィート像に、異を唱えようというものでもなければ、それを修正しようとするものでもない。むしろ、イギリスにおける音声学・英語学の発展に大きな貢献をしたスウィートの全体像を明らかにするためにも、従来、あまり詳しく論じられてこなかった、綴り字改革論者という側面に光を当てたいと考えるものである。

ただ、言語学会の綴り字改革案については、別稿(山口2004)で論じたので、本稿では、スウィートのその他の綴り字改革論を取り上げることとする。具体的には、2.2で『音声学提要』の付録「綴り字改革の原理」(1877)を、2.3で「綴り字改革と英文学」(1884)を、2.4で「綴り字改革と英語の実際研究」(1885)を取り上げる。このうち、『音声学提要』付録の「綴り字改革の原理」については、「簡易ローミック」の分析、という視点からの先行研究は少なくない。本稿では「綴り字改革の原理」が、綴り字改革論として持っていた意味、果たした役割に焦点をあてる。また、「綴り字改革と英文学」および「綴り字改革と英語の実用的研究」については、スウィートの論考として取り上げられること自体が、少ないものであり、内容の紹介とその背景紹介に重点を置く。

【スウィート略歴】

本論に入る前に、ヘンリー・スウィートの略歴を確認しておこう。

ヘンリー・スウィートは1845年9月15日、法廷弁護士の父のもとロンドンに生まれた。ロンドンのキングズ・カレッジ・スクールに通ったあと、1863年にハイデルベルク大学に留学し、アドルフ・ホルツマンのもとで、比較言語学およびゲルマン言語学を学んだ。帰国後は法律事務所勤務のかたわら、従弟のヘンリー・ニコルとともに、メルヴィル・ベルのもとで音声学を学ぶ。1869年から1873年までオックスフォード大学ベリオル・カレッジで古典学を専攻し、在学中から言語学会で論考を発表し始めた。その言語学会では、1876年から1878年まで会長を務める。1877年には『音声学提要』を発表した。その後、音声学、英文法、英語史、比較言語学の分野で、影響力ある論考を多数出版した。ただ、大学でのポストには恵まれず、1901年によりやくオックスフォード大学の音声学講師（リーダー職）を得るに至った。1912年に悪性貧血により亡くなる。

さらに、本節で扱う1870年代後半から1880年半ばまでのスウィートの綴り字改革関連の著作、活動について、年表形式で整理しておこう。下線を引いたものについて、本稿で詳しくとりあげる。

【スウィート綴り字改革関連年表】

1876-1878年 言語学会会長を務める。

1877年 『音声学提要 綴り字改革の原理についての一般的な説明を含む』発表。

5月29日 ロンドン学務委員会請願運動支援の綴り字改革公開会議出席。

1878年 言語学会での綴り字改革についてエリス、マリー、ニコルに私的に呼びかける。

1880年 5月21日 言語学会年次総会で、会長ジェームズ・マリーが言語学会としての綴り字改革案策定を呼びかけ、スウィートが原案を作成。

7月 英語綴り字改革協会（1879年設立）の協会誌『スペリング・リフォーマー』創刊号で、言語学会の綴り字改革運動が紹介される。

7月9日、16日スウィートの原案を言語学会例会で議論。その後スウィート修正案作成。

11月5日、19日、26日。スウィートの修正案を言語学会会合で議論。

12月14日 英語綴り字改革協会例会で、スウィート、言語学会の綴り字改革案について報告。

1881年 スウィート、英語綴り字改革協会副会長になる。

1月28日 言語学会例会でスウィート作成の「英語綴り字の部分的修正」承認。

5月5日 ケンブリッジ文献学協会で「綴り字改革と英文学」発表。

5月21日 言語学会年次総会で会長エリスが「英語綴り字の部分的修正」について批判的に紹介。スウィートはこれに対して反論。

11月22日 英語綴り字改革協会例会で「英語の基本音声」発表。

1882年 2月3日 言語学会例会でアメリカ言語学会との協力呼びかけ。

1883年 4月20日 言語学会例会でアメリカ言語学会との協力のための提案。

1884年 「綴り字改革と英文学」（ケンブリッジ文献学協会発行）。

12月16日 英語綴り字改革協会で「綴り字改革と言語の実用的研究」発表。

1885年「綴り字改革と言語の実際研究」(英語綴り字改革協会)。

2.2 『音声学提要』付録「綴り字改革の原理」(1877)

【音声学提要】

綴り字改革についてのスウィートの考えを詳しく述べた最初の論考は、1877年に出版された『音声学提要 綴り字改革の原理についての一般的な説明を含む』(*A Handbook of Phonetics Including a Popular Exposition of the Principles of Spelling Reform*, 以下『音声学提要』と略す)に、補論として付された「綴り字改革の原理」(*The Principles of Spelling Reform*, Sweet 1877, pp.167-210)であった。発表の形態からも明らかなように、この綴り字改革論の一番大きな特徴は、一般音声学の理論を踏まえた論だということである。

1970年代に、スウィートの音声学関連の論考を *Indispensable Foundation* として編集した音声学・音韻論研究者のヘンダーソンは、「綴り字改革の原理」も全文収録しており、その理由を次のように説明している。「今日では、スウィートのように綴り字改革の『絶対的必要性』を信じる音声学者ばかりでもないだろうが、スウィートがこの主題について書いたものに込められた知見、経験、言語学的洞察は今なお、言語学や音声学を実践し、学ぶ全ての人々にとって極めて意義のあるものである」(Henderson 1971, p.198) というのだ。こうした判断は、「綴り字改革の原理」のなかで提案される「簡易ローミック」が、『音声学提要』本文のなかでも、音声表記システムの一環として組み込まれていることと無関係ではないだろう。そして、やはり、『音声学提要』本文が示した学問的水準の高さ、そしてその後のスウィート自身の音声学者・言語学者としての達成が、彼の綴り字改革論にも、独特のステータスを与えていることは否めないだろう。

『音声学提要』は、スウィートの一般音声学に関する最初のまとまった著作であり、その一連の音声学関連の著作、たとえば *Elementarbuch des gesprochenen Englisch* (1885), *The Primer of Spoken English* (1890), *The Primer of Phonetics* (1890), *Sounds of English* (1908) などのなかで、中心的な位置を占める書物にもなった。スウィートの音声学研究の功績を称えて、『国民伝記辞典』補遺(1927年)で、アニアズが「ヨーロッパに音声学を教えた」という高い評価を下したときには、スウィートへの愛国的な肩入れもあったことだろう(また、アニアズがこのコメントをするに際して、スウィートの著作のなかでも『音声学提要』に言及していない奇妙さも、つとに指摘されているところである)。しかし、いずれにしても、『音声学提要』が、19世紀のイギリスにおいて、アレグザンダー・ジョン・エリス、アレグザンダー・メルヴィル・ベルが培ってきた音声学研究の土壌の上に、ヘンリー・スウィートが築いた重要な基盤であることは定まった評価だといってよいのである(Kemp 1995, pp.383-6)。本文は四部構成で、続いて音声表記サンプルが示され、最後に40ページにわたる付録「綴り字改革の原理」が付されていた。

【綴り字改革の原理】

「綴り字改革の原理」は、音声学ヘンリー・スウィートが、理論的知識と洞察力を強みとしながら、自らの考えた表音式綴り字案「簡易ローミック」を強く推奨する論考であった。この背景には、1870年代も後半になって、綴り字改革運動が確かな広がりを見せていたという状況、そして、それと同時に、具体的改革案が無数に現れるようになっていたという事情がある。

「綴り字改革の原理」執筆の目的を語る序文でスウィートは、綴り字改革の必要性について、極めて楽観的な見解を示す。そして一方で、改革運動の直面していた問題点を指摘している。「表音改革の絶対的な必要性は、実践的教師だけでなく科学的言語学者によっても、ほぼ万人に認められている。偏見や不合理な保守主義が生み出した反対意見にも、うまく対応することができるようになり、現在唯一の問題になっているのは、どの体系を採用するか、という点だけである。」(Sweet 1877, p.169, 下線引用者) というのである。

1877年の時点で、はたして、ここで述べられているほど綴り字改革の必要性への認識が進んでいたのか、また、反対意見が説得できたのかについては、大いに疑問の余地がある。ただ、この時点において、どの綴り字体系を採用するかが、未解決の大きな問題であることは、まさに、その通りであった。スウィートが続けて指摘するように、「平均的な知力を持ち、読み書きのできる人が100人集まれば、現行の綴り字体系に何らかの改良を加えたもの綴り字体系を、100通り作りだすことができる」という状態だったのだ。しかも、ピットマンやエリスがそうであったように、一人の人間が、何種類もの案を作ったり、作った案を修正し続けたりすることが、珍しくなかった。伝統的な綴り字を変えることよりも、どのような綴り字に変えるかその改革案を選ぶことのほうが困難だ、とさえ言われるほどだったのである。こうした百家争鳴状態の中で、スウィートは、綴り字改革案を作る前に理解しておくべき、音声学的な原理を記す必要があるとして、「綴り字改革の原理」を著したのだった。「こうした一般原理、および英語の音の構造や関係についての基礎知識を持たないひとは、綴り字改革について意見を述べる資格はない」(p.170)とまで言い切っている。

しかし、綴り字改革の前提になる音声学的な原理を記すとは言いながらも、結局のところ、この論考でスウィートが行っているのは、自分の綴り字改革案の説明と推奨であった。音声表記の原理を体系的に記すことと、それを具現するシステムを提案することは、一体不可分なのである。スウィートは、「綴り字改革案が従うべき基本原理」を著しながら、自分の案「簡易ローミック」を詳述していくのである。

なお、スウィートは「綴り字改革の原理」のなかでは、「簡易ローミック」(Broad Romic)という語は用いずに、終始「ローミック」と記している。一方、『音声学提要』の本文中では、「簡易ローミック」と、「精密ローミック」を提案し、区別して説明しているのだが、時に応じて、両者を合わせてローミックと呼ぶこともある(pp.100-108)。これに対して、本論では、用語上の混乱を避けるために、原文で「ローミック」とだけ言及されている場合も、記述内容や例文から判断して、「簡易ローミック」か「精密ローミック」かのどちらかだけを念頭に置いた議論が

されていることが明らかな場合は、「簡易」または「精密」を加えて言及する。従って付録「綴り字改革論の原理」で言及されている「ローミック」は、基本的に「簡易ローミック」のことなので、そのように記す。

【簡易ローミック】

簡易ローミック表記の例を一部引用しておこう。

it əp·iəz dhət dhər ar in iqglænd ən weilz, in raund nəmbəz, faiv milyən culdrən əv dhə leibəriq popyəl·eishən, huu mei bi expe·ktid tu ət·end pəblik elim·entəri skuulz. (Sweet 1877, p.210)

伝統的な正書法で表記するならば、以下のようになるところであろう。

It appears that there are in England and Wales, in round numbers, five million children of the labouring population, who may be expected to attend public elementary schools.

(試訳：イングランドとウェールズには、公立基礎学校に入学が予測される労働者階級の子供たちが、約500万人いると思われる)

簡易ローミックの表記からは、綴り字改革案というよりも、発音表記であるような印象を受ける。小文字だけを用いていること、また、シュワー<ə>を用いて、弱母音表記を行っていることがその大きな要因であろう。表記の特徴を詳しく見てみよう。

特定の綴り字改革案の特徴を考えると、第一に表記に際してどのような文字・記号が使われているかということ、第二に表す対象である音声言語をどのように分析し表記の対象としているかということ、第三に文字・記号と音の対応関係である。これらの点についてどのような選択をするかでその案の特性が決まり、現行正書法との乖離の度合いも決まる。

第一点の文字・記号については、簡易ローミックの特徴は、小文字のみを使用すること、二重字や三重字、合字、反転を用いることである。二重字・三重字のなかでも、<ng>, <tsh>, <dzh>について、それぞれを<q>, <c>, <j>,で代用するという簡易ローミック「縮約版」もあり、上で引用したのはこの例である。<q>, <c>, <j>を代替として用いるのは、これらの文字が対応する子音は、他の文字で表すことができ、これらは「余剰」になるからであった。

「新字」は、ローマン・アルファベット文字の反転や合字に限って用いられた。<a>と<e>の合字のアッシュ<æ>や (<ænyuəli>= annually など)、eを反転したシュワー<ə>である。(なお、この<ə>は基本的には弱母音表記に用いられているが、<nəmbəz> (= numbers) の強勢のある母音にも使われている。引用箇所以外では<frəm> (=from) の例もある)。文字の反転は、既存の活字を使えるという利点があった (pp.174-5)。

ただ、使用文字についてはスウィートにも迷いはあったようで、最初は新字なしで始めて、そ

の後徐々に導入することも示唆している (p.192)。たとえば、<th>の無声音と有声音に、ギリシア文字のシータ <θ> とデルタ <δ> を用い、また、<ng>の後方鼻音に、ピットマンがフォノタイプで導入した <ŋ> を用いるなどである。

第二点の分析と表記の精密度合いについての簡易ローミックの特徴は、簡略表記だということであった。「書きやすく、覚えやすい文字を使って、音の区別のなかでも意味上の区別に対応する粗い区別だけ記す表記方法」として構想されているのだ (p.103)。なお、「綴り字改革の原理」では、この表記のみが提案されているが、『音声学提要』本文では、第4部で、これを補完して、より細かい音声学的特徴を記述するための「科学的な」表記体系として「精密ローミック」も示されていた (p.105)。

第三点の文字と音の対応について、簡易ローミックでは、母音字について、英語の伝統的正書法の音価ではなくて、ラテン語での音価を与えていた。ローミックと呼ばれる所以である。スウィートは学問の発展においては、愛国的プライドを随所で表しているが、音声表記については、ヨーロッパ大陸と共通の音価を持たせることの重要性を説いている。

【音声表記システムの探究】

スウィートの綴り字改革案「簡易ローミック」は、音声表記システム「ローミック」の一部をなしており、そのシステムには「精密ローミック」も含まれている。この構成を見ていると、音声学者であるスウィートが言語を表す音声表記システムのひとつとして、綴り字改革を考えていたことがわかる。

表音式の綴り字改革案を、音声表記システムの一環として考案する、という言い方は、同語反復的に思われるかもしれないが、ここで指摘したいのは、スウィートの関心が、綴り字改革そのことだけにあるのではなくて、音声言語を書き表す仕組み全体にあったこと、そして、そのひとつの側面として、綴り字改革論があったということである。音声表記システム全般を俯瞰する構想こそが、スウィートの綴り字改革論を、同時代の幾多の綴り字改革案と大きく区別するものであった。同時代に、スウィートと同様の広い視野で綴り字を唱え、かつ、具体的な改革案を提唱していたのは、スウィートのほかにはおそらく、アレグザンダー・ジョン・エリスがいるくらいであろう。ピットマンやそのほかの19世紀イギリスの綴り字改革論者たちは、綴り字改革案を作成するときに、綴り字改革案と一般的音声表記システムの関連、類似と相違について、必ずしも明確に意識していたわけではなかった。

歴史的な経緯を見るならば、綴り字改革論を、音声表記システム考案から切り離して考えることはできない。ヨーロッパにおける音声表記システム探求の主な目的は二つあった (cf. Kemp 1995, pp.388-401)。ひとつが、綴り字改革であり、またもうひとつがアジア、アフリカ、アメリカの言語音表記である。初期近代に書き言葉標準化が進み、正書法が固定されていくなかで、それに付随して各国 (特にイギリスとフランス) で正書法改革運動が起こる。一方で、ヨーロッパ諸国の世界的勢力拡大のなかで、アジア、アフリカ、アメリカの言語と接触する機会が増え、宣

教、通商、外交、学術研究などの目的のために、これらの言語をローマン・アルファベットで表記する必要性が感じられたのである。

綴り字改革運動という目的と、他言語のローマン・アルファベット表記という目的は、大きくかけ離れている。綴り字改革運動は、理想主義者、夢想家の机上の空論とみなされがちであったが、こうした他言語のローマン・アルファベット表記には、現実の必要性があった。これはその後の実現度合いの違いを見ても明らかであろう。正書法改革案は、特に英語に関しては、ほとんど定着することはなかったが、一方で、アジア、アフリカ、アメリカの言語のローマ字化は着々と進行してきたのである。フランスでは、コンスタンティン・ヴォルネー (Constantin Francois Volney, 1757-1820) の遺言と遺された24,000フランによって、東洋の言語をローマン・アルファベットで表記するため統一方法を決定するためにヴォルネー賞が設立され、1822年から20年以上にわたって、年毎の課題が設定されていた。

19世紀半ばのイギリスでは、特に宣教団体が熱心に取り組んでいた。ブンゼンが1854年には、ロンドンの邸宅でアルファベット会議を開き、ヨーロッパ外の言語を音声表記するのに使用するアルファベットを議論したときには、会議には、英国聖公会宣教協会 (Christian Missionary Society) のほか、バプテスト宣教協会 (Baptist Missionary Society)、ウェスリー派宣教協会 (Wesleyan Missionary Society) 代表も出席したのである。このなかで、イギリスで最も大きな宣教団体であった国教会系の、英国聖公会宣教協会は、1848年にすでに「無文字言語をローマ字を用いてアルファベット表記する規則：アフリカの諸言語について」 (Rules for reducing unwritten languages to alphabetical writing in Roman characters: with reference especially to the languages spoken in Africa) を発表しており、さらにベルリンの著名なエジプト学者カール・レプシウスに、アルファベット作成を依頼していた。ここでドイツ人のレプシウスが出てくるのは、プロイセンの駐英大使カール・ブンゼンが、イギリスとドイツの学問交流促進に積極的な役割を果たしていたからである。

レプシウスは、ブンゼン主催のアルファベット会議において、「スタンダード・アルファベット」を発表する。会議として一つの案に決定することはなかったものの、英国聖公会宣教協会は、レプシウスの案を採用することを、後日正式に決定した。そして、1854年にはドイツ語で、1855年には英語で「無文字言語および外国の書記体系を、ヨーロッパ文字を用いた統一的正書法で表すための標準アルファベット」 (英語の書名は、*Standard Alphabet for reducing unwritten languages and foreign graphic systems to a uniform orthography in European letters*) が刊行された。1863年には、英国聖公会宣教協会からの要請により、第2版が英語で出版された。表記対象として想定される言語は、初版の54言語から117言語へと増え、31の補助記号、200以上の活字を用いられることになった²⁾。

さて、ヘンリー・スウィートの、『音声学提要』に話を戻そう。スウィートは、このなかで同時代の他の音声表記システムに言及している。このなかには、カール・レプシウスの考案した「スタンダード・アルファベット」 (1854, 1863) も入っていた (Sweet 1877, p.101)。スウィート

が『音声学提要』のなかで、レプシウスのスタンダード・アルファベットに言及するのは、決して肯定的な文脈においてではない。スウィートは、ローミックでは使用文字を制限し、補助記号を用いないという判断を述べる際に、新字や補助記号を多用する好ましくない例としてレプシウスのスタンダード・アルファベットとピットマンのフォノタイプを挙げている。

この他にもスウィートは、アレグザンダー・ジョン・エリスの「グロシック」(Glossic)や「パレオタイプ」(Paleotype)、アレグザンダー・メルヴィル・ベルの「ヴィジブル・スピーチ」などへ言及しながら論を進めた。

スウィートは特に、ベルが1865年に発表したヴィジブル・スピーチを高く評価していた。ベルから直接音声学を教授されたということもあるだろうが、特に高く評価していたのは、それが調音方法を明示する音声表記システムであるからであった。「綴り字改革の原理」では、ヴィジブル・スピーチを「合理的なアルファベット」と評している。ただ、理論的側面は優れているが、具体的な細部については問題が残っているので、これは綴り字改革の選択肢とすることはできず、「純粋に科学的なアルファベットにとどまらざるを得ない」というのだ (Sweet 1877, p.173)。

エリスについては、細かな音声学的特徴を表すためのパレオタイプへの言及は少なく、反転文字の使いかたなどの関連で参照しているのみであった (pp.175, 184)。一方、綴り字改革案として提示されたグロシックへの言及は多い。エリスもまたスウィートと同じように、全体的な音声表記システムを視野にいたした上で、精密表記の体系や簡略表記の綴り字改革案を作成した音声学者であった。スウィートが『音声学提要』を著したときまでに、エリスの大著、『初期英語の発音について』(*Early English Pronunciation*)は全5部のなかの、第4部までが出版されていた(1869年第1, 2部, 1871年第3部, 1874年第4部)。スウィートは、エリスのグロシックを簡易ローミックと競合する強力な案として、強く意識していたようで、ローミックとグロシックの比較に多くのページを費やしている (pp.202-8)。

【発音教育のための綴り字改革】

「綴り字改革の原理」では標準発音の教育と綴り字改革の関連についても、興味深い主張がなされている。この点について見ておこう。

1877年に出版されたスウィートの「綴り字改革の原理」は、「労働者階級の子供たちの基礎教育のために綴り字改革を」という動機付けが、綴り字改革論者の中で、とりわけ強かった時代背景を反映していた。たとえば、先に引用した簡易ローミックの例文のなかでも、労働者階級と基礎学校(小学校)が主題となっている。一般に、綴り字改革論者が、1870年の基礎教育法制定後の時代という背景のなかで論を進めたときに、考慮されるのは主として読み書き教育の効率化である (cf. 山口2005)。しかし、それだけにとどまらず、標準発音習得という問題を考える綴り字改革論者もあった。スウィートもその一人だったのである。

「綴り字改革の原理」では、「特に考慮すべきこと」として最後にいくつかの論点が出されているが、そのなかの「発音の諸変種」(Varieties of Pronunciation)という項で、スウィートは、標

準発音の教育と綴り字改革の関連を述べた。学校では、綴り字を教えるのではなく発音を教えるべきだ、とスウィートは言う。そして、視学官が行う試験科目も、「読み書き算数」ではなく、「発音、エロキューション、知的な読解」とするべきだと述べた。「発音に注意しなさい。綴り字は自ずと後からついてくるでしょう」(Take care of the pronunciation, and the spelling will take care of itself.) というスローガンを掲げて、標準発音教育を普及させるべきだというのである(Sweet 1877, pp.195-7)。

スウィートが思い描いているのは、こうして発音教育を徹底させることで、階級間の大きな障壁が取り払われた社会が生まれることであった。「発音が完全にコントロールできるようになれば、地方訛りや無教養な発音がやっと完全に除去されることになるだろう。そして、社会の異なる階級間の最も大きな障壁のひとつが、こうして廃止されることになるのである」(p.196) というのである。この考え方は、何かを思い出させないだろうか。そう、バーナード・ショウの「ピグマリオン」(およびそれを原作としたミュージカル「マイ・フェア・レディ」)である。このあと、30年以上経ってからバーナード・ショウは、スウィートをモデルの一人として戯曲「ピグマリオン」の音声学教授ヒギンズ教授を造形した。スウィートは、単なる性格の気難しさだけでなく、発音と階級についての考え方においても、確かに、ヒギンズのモデルの重要な一人であったことがわかる。なお、「ピグマリオン」の初演は、1914年であるが、たとえば1921年に出された英語の教授法に関する政府報告書「ニューボルト・レポート」においても、なお同様の見解は支持されていた。「英語教育が、きちんとそしてあまねく行われたら、現在多くの偏見を引き起こし、また会話の困難を引き起こしてもいるところの、教育を受けたひとの話し言葉と教育を受けていないひとの話し言葉の差異というものは、徐々に消えていくであろう」(Mugglestone 1997, p.314) というのである。言語が階級差を実体化していると考えられたのであった³⁾。

スウィートのようにはっきりと意識していたかどうかは、個人差があるだろうが、基礎教育とのかかわりで表音式綴り字導入を推奨した綴り字改革論者たちは、皆、大なり小なりこれと似たような方法で、発音と階級の関係を理解していた。「地方訛りや無教養な発音がやっと完全に除去される」ことになれば「社会の異なる階級間の最も大きな障壁のひとつが廃止される」(Sweet 1877, p.196) というものである。子どもたちが標準発音を身につけていけば、社会階級の差異が取り除けるという考え方は、国民統合のための初等教育という制度と大きな親和性を持っていたのであろう。

2.3 「綴り字改革と英文学」(1884)

ヘンリー・スウィートの綴り字改革関連論考のなかに、「綴り字改革と英文学」という題の短い論考がある。1881年5月に行った口頭発表をもとにして、1884年に8ページの小冊子として発行されたものである。これは、主題のためか、または出版の形態ゆえか、スウィートの論考としてはあまり知られていない。そこで本項では、その内容、発表の背景について紹介し、この時期のスウィートの綴り字改革への取り組みを示すものとして位置づけたい。

【言語学会の綴り字改革案】

「綴り字改革と英文学」の位置づけを考えるには、この時期のスウィートの主要関心事であった言語学会の綴り字改革運動を整理しておく必要がある。1880年から1881年にかけて言語学会で「英語綴り字の部分的修正」と呼ばれる綴り字改革案が作成され、承認された経緯と内容については、拙論（山口2004）で述べた。本論との関連で必要な概要を述べておこう。

スウィートは、1876年から1878年にかけて言語学会の会長を務めていた。その間に彼は、学会の主要会員であったアレグザンダー・エリス、ジェームズ・マリー、ヘンリー・ニコルに私的に呼びかけ、言語学会として綴り字改革に取り組むことを提案している。それが具体化したのは、1880年5月の言語学会の年次総会においてであった。このときには、会長は『新英語辞典』編集主幹を務めているジェームズ・マリーに変わっていた。マリーは学会として綴り字改革に取り組む必要性を訴える。これに応える形で、スウィートは、学会の綴り字改革案の原案を作成した。原案は、学会内の小委員会で同年7月と11月に合計5回議論された。スウィートはこれらの議論を踏まえて最終案を作成した。そして1881年の言語学会例会に提案し、承認された。

「英語綴り字の部分的修正」の本文自体が、この修正綴り字で印刷されている。一節を引用しておこう。

Spelling Reform was at first a purely philanthropic moovement, opozed by nearly all filologists, both within the Society and outside of it, on etymological grounds. (Philological Society 1881, p.4)

現行正書法と異なるのは、<filanthropic>, <moovement>, <opozed>, <filologists>のみである。「英語綴り字の部分的修正」案の特徴は、タイトルのとおり、「部分的」だということで、表音主義を首尾一貫させたものではなかった。用いる文字は現行正書法で用いられている26字のみである。スウィートが1877年の『音声学提要』で提唱した簡易ローミックに比べると、はるかに、現行正書法に近く読みやすい。

1881年1月にスウィートの案が言語学会例会で承認されたのち、最初の年次総会となった、同年5月の言語学会年次総会では、マリーの次に会長に就任したアレグザンダー・エリスが、この案について、厳しい批判を加えた。部分的修正であるところが、表音主義者エリスの気に入らなかったのである。スウィートは、これにたいして、部分的修正案を擁護する発言をしている。

この後、「英語綴り字の部分的修正」は、1880年代半ばごろまで、言語学会の議事録や学会誌で一部用いられる。ただ、あくまでも言語学会は「使用を認めた」というだけであって、使用を強請したわけではなく、推奨したわけですらなかった。これ以上広がることはなく、やがて用いられなくなっていった。

【言語学会外でのスウィートの綴り字改革活動】

言語学史的な議論とは全くかけ離れたことであるが、スウィートの人付き合いの悪さは、伝記著者や同時代の証言によって繰り返し語られており、半ば伝説化している (cf. イェスベルセン pp.86, 126-7)。それゆえ、綴り字改革運動において、他のメンバーと共にひとつの大義のための活動に、熱心に従事していたというスウィートの一面は、いささか意外な感がある。もちろん、こうした個人的な性格、社交性と、言語学者、音声学者としての仕事に直接関係があるものではないことはいうまでもない。ただ、綴り字改革という事柄の性質上、組織的に普及を図ることも非常に重要なので、その点において意外な気がするのである。スウィートの毒舌の大きな原因の一つは、学者としての実力に見合った社会的評価が得られなかったことだといわれ、具体的には1885年と1901年の人事の機会にオックスフォード大学の教授職が得られなかったことが大きいという。綴り字改革運動を積極的に行っていたのは、これ以前の時期だったので、後半生ほど他人嫌いでなかったのかもしれない。いずれにせよ、スウィートは、1880年から1881年にかけて言語学会で議論し承認された自らの「英語綴り字の部分的修正」については、言語学会外の場も利用しながら、宣伝に尽力していた。

たとえばスウィートは、言語学会の綴り字改革運動を学会の範囲を超えて広めるための窓口として、英語綴り字改革協会を活用している。英語綴り字改革協会は、1879年に設立された任意団体であり、教育関係者や言語学関係者およびその他の領域の綴り字改革論者たちが一堂に会する場を提供するものであった。スウィートはこの協会の1880年12月14日の例会で、言語学会小委員会の最終的な結論について報告し、それに対する議論を求めている。綴り字改革案について言語学会小委員会での議論が終わり、あとは学会での承認を求めただけになっていたタイミングである。この例会の様子は、翌1881年1月の協会月刊誌『スペリング・リフォーマー』に報告されている (*Spelling Reformer*, Vol.1, No.7, pp.101-3)。

【ケンブリッジ文献学協会での発表】

英語綴り字改革協会例会での発表の約半年後、スウィートは、ケンブリッジ文献学協会 (Cambridge Philological Society) でも、綴り字改革に関する口頭発表を行い、言語学会の綴り字改革案について報告を行った。これが、「綴り字改革と英文学」である。発表の日時は、1881年5月5日で、言語学会年次大会の直前のことであった。この発表内容が、後に1884年に、8ページの小冊子としてケンブリッジ文献学協会から出版された。以下の考察も、その小冊子に基づいている。

発表の場となったケンブリッジ文献学協会は、1860年代後半にサンスクリット学者・比較言語学者のエドワード・カウエル (Edward Byles Cowell, 1826-1903) らが設立した学術団体であった。名称の中の「フィロロジカル・ソサイエティ」について、本稿では1842年設立の「フィロロジカル・ソサイエティ」に対しては「言語学会」という訳語を用いてきた。が、ケンブリッジの「フィロロジカル・ソサイエティ」は、古典学研究の比重が大きく、また現在は、古典学研

究の学会としてケンブリッジ大学古典学部内に存続している。そこで本稿では「言語学会」という訳語を避けて、便宜的に「文献学協会」と訳した。

「綴り字改革と英文学」によると、1884年の時点で、ケンブリッジ文献学協会の会長は、ケンブリッジ大学古英語教授で、言語学会の中心的会員の一人でもあったウォルター・スキートである。副会長として名前が挙がっている11人の専門領域を見ると、最多の4名が古典学研究者であり、また書記を務めている2人も古典学を専門としている。古典研究を意味する「フィロロジー」の影響の強い協会であったことがわかる。

ケンブリッジ文献学協会の名を、1870年代、1880年代の綴り字改革運動関連資料のなかで名前を見ることはほとんどない。このように関連の口頭発表があり、また小冊子も出版されたという背景には、綴り字改革論者であったスキートの影響力があったのであろう。

さて、ケンブリッジ文献学協会でのスウィートの発表の大半は、英語の歴史の観点から綴り字改革の正当性を論じるものであり、正書法がかつてはより表音的だったことや、発音は変化するのに、綴り字は固定されたために、綴り字が表音的でなくなってきた経過の説明に費やされていた。そして発表の最後には、言語学会で1880年から1881年にかけて取り組まれてきた部分的綴り字修正案についての報告があった。次の段階として、アメリカの言語学会と共同での綴り字改革が交渉、企画されていることも述べられた。やはり、この部分こそが、スウィートが一番強調して伝えたい点であったのだろう。

奇妙なことに、このような発表内容につけられたタイトルは、「綴り字改革と英文学」であり、また小冊子に記されている正式タイトルは「英文学の歴史との関連における綴り字改革」であった。しかし、いわゆる英文学や英文学史は語られておらず、そこで語られているのは、大半が英語の歴史と綴り字改革の関連についてだったのだ。おそらくこれはタイトルと内容が、単純にずれていたということではない。「英文学」は、確かに、発表中で一箇所、言及されているのである。「綴り字改革にもっとも声高に反対しているのは、英語の歴史を知らない人々で、英文学・英語 (English literature and language) を大学の科目の一部にしようという試みに、最も強く反対している人々なのです」という箇所である (Sweet 1884, p.5, 下線引用者)。この記述の意味について、考えてみよう。わずか一段落二十数行で取り上げられている論点で、論考のごく一部なのであるが、綴り字改革に対する当時の賛否両論の背景を知るうえで、興味深い一節なのである。

上の引用箇所からも明らかになるのは、「綴り字改革と英文学」というときにスウィートが念頭においていた「英文学」は、当時、オックスフォード大学やケンブリッジ大学で専門科目として導入することの是非が議論されていた「英文学」であったということである。「英文学英語」または「英語英文学」として、コースを設置することが議論されていた「英文学」なのである (なお、オックスブリッジにおける英文学の科目導入についてはBacon (1998) 参照のこと。)

「綴り字改革にもっとも声高に反対」し、かつ「英文学・英語を大学の科目の一部にしようという試みに、最も強く反対している人々」について語るとき、スウィートが具体的に念頭においているのは、歴史学者エドワード・フリーマン (Edward Freeman, 1823-1892) であった。スウ

イートは、論考のなかでは「フリーマン氏」とだけ言及している。フリーマンはこのあと1884年にはオックスフォード大学近代史欽定講座担当教授となった人物であり、『ノルマン征服の歴史』(1867-76)などを著す傍ら、より一般的な時事問題に関しても新聞、雑誌に多くの寄稿を行っていた。綴り字改革も、大学での英文学研究の要不要も、こうした彼の幅広い関心主題の一つであった。

スウィートによればフリーマンは、綴り字改革にも、また、オックスフォード大学への英文学専攻導入にも反対していた。綴り字改革に関しては、フリーマンは表音式綴り字を「英語の歴史すべてを無謀にも消し去ってしまう」(Sweet 1884, p.5)と批判していた。ケンブルやソープの古英語研究にも親しんでいたフリーマンには、綴り字改革論は看過できない主張だったのであろう。これに対してスウィートは、表音式綴り字が英語の歴史を消してしまうというのは、英語の歴史を知らないからだと批判した。グリムの法則など言語学の一般法則は、表音式綴り字による記録が残っていたからこそ発見し得るのだというのである。

また、フリーマンはオックスフォード大学で英文学を専門のコースとして設けることにも強く反対していた。オックスフォード大学に英語研究の教授ポストを設置するかどうかは1877年から議論されていたのである(Bacon 1998, p.293)。フリーマンは英語の研究は、他の現代語研究と共に、言語学の一環として取り込まれるべきで、英文学研究と英語の研究が、「英語英文学」「英文学英語」または「イギリス研究」としてひとつのコースを成すべきではない、と主張していた(Bacon, pp.277-8)。

この点に対するスウィートの反論は「英文学と綴り字改革」のなかでは、直接は述べられていない。が、フリーマンへの批判を裏返して見ると、スウィートの見解は、英語・英文学研究は大学の科目に相応しいものであり、また学問的に英語の研究を行うためには、表音式綴り字が必要である、ということだったと推測できよう。なお、スウィートが、オックスフォード大学マートン・カレッジの英語英文学教授職を得ることができず、大きく失望するのは1885年のことである。

英文学を大学の科目として認めるかどうかという問題は、フリーマンやスウィートのいるオックスフォード大学だけでなくケンブリッジ大学でも大いに議論される場所であった。ケンブリッジ文献学協会の古英語研究者スキートにとっても、また、そこに集う東洋学者や、古典学者、比較言語学者たちにとっても、関心事であっただろう。スウィートは「英文学と綴り字改革」というタイトルを選ぶことで、関心のもたれている主題に結び付けながら、自らの綴り字改革論、そして具体的には言語学会の綴り字改革の状況を伝えようとしていたと、推測することもできるのである。

2.4 「綴り字改革と言語の実際的研究」(1885)

「綴り字改革と言語の実際的研究」(Spelling Reform and the Practical Study of Language)は、ヘンリー・スウィートが、綴り字改革の視点を入れながら、言語学が外国語教育にどのように貢献できるかを論じた論考である。主張の中心は、言語学研究は、方法論においては科学的であり、

目的においては実際的でなければならない、そして、言語学が持ちうる実際的な目的のなかで、一番重要なものが外国語教育への貢献だ、というものであった。

この論考は、まず1884年12月16日の英語綴り字改革協会例会で口頭発表され、1885年に同協会から合計16ページの小冊子として出版された。「言語の実際的研究」に関するスウィートの論考は、他にも発表されているが、「綴り字改革」とタイトルに入っているのは、これのみである。この論考はスウィートの応用言語学への貢献が、近年研究者の注目を集め始めたなかでも、取り上げられることがほとんどない。他の論考と内容の重なる部分が多いこともあるが、綴り字改革という視点、英語綴り字改革協会の小冊子ゆえの入手のしにくさも、無関係ではないだろう。本節では、この論考の内容を紹介し、その背景を論じる。

【言語科学の実際的目的】

言語学と外国語教育の関係という主題について、スウィートは1860年代後半からすでに関心をもっていた。「言語の実際的研究」という語が主題に入った論考は、何度か形を変えて発表されている。まず1876年には「言語の実際的研究」というタイトルで第一稿を書いていた。ただ、理論中心で例が少なかったため、この時点での出版は控えたのだという。その後、1884年5月の言語学会年次総会では、第一稿の要旨にあたるものを、同じ題の「言語の実際的研究」という論考として発表した。これは言語学会学会誌に収録される。そして、この言語学会年次総会の7か月後、1884年12月の英語綴り字改革協会例会で、本節でとりあげる「綴り字改革と言語の実際的研究」を口頭発表したのがあった。これも翌1885年に活字になる。最終的には「言語の実際的研究」は、1899年になってから『言語の実際的研究：教師と学習者への手引き』という主題の全二十章からなる書物として完成されることになる⁴⁾。

「綴り字改革と言語の実際的研究」および、「言語の実際的研究」(1884)や『言語の実際的研究：教師と学習者への手引き』(1899)でスウィートが重視するのは、「生きた言語学」(living philology)であった。生きた言語学の三原則として、スウィートは、第一に、理論的な研究であれ、実際的な研究であれ、「生きている」話し言葉、つまり死語ではなく現在用いられている話し言葉に基盤を置かなければいけないこと (Sweet 1885c, p.6)、第二に、言語の研究は全て、音声学に基づいていなければならないこと (p.8)、そして第三に、言語の実際的研究は、表音記号を用いて行わなければならないこと (p.9) を挙げる。

三点をまとめると、言語の実際的研究とは、実際に話されている言語を観察し、音声学の原理をふまえて、表音記号を用いて表したものを使って行うべきだということになる。外国語教育に音声学的知見を活用するべきだ、ということ語っているわけである。

【リフォーム・ムーブメント (外国語教育刷新運動)】

音声学の成果を外国語教育に応用するという考え方は、スウィート独自のものではなかった。1880年代から90年代にかけて、ヨーロッパ諸国では、「リフォーム・ムーブメント」(Reform

Movement) と呼ばれる外国語教育刷新運動が、盛んになった。リフォーム・ムーブメントは、音声学者と外国語教師が、国や言語、専門分野の枠を超えて、外国語教授法の改革に取り組んだ動きの総体である。音声学の専門家たちが、学校での外国語教育に関心を示し、一方、教師たちも音声学に関心を示した。音声学者として理論的に貢献し、中心的な役割を果たしたのは、ヘンリー・スウィートのほかに、ドイツのヴィルヘルム・フィエトル (Wilhelm Viëtor, 1850-1918)、フランスのポール・パッシー (Paul Passy, 1859-1940)、デンマークのオットー・イエスペルセン (Otto Jespersen, 1860-1943) らである。スウィート以外の三人は、皆、学校の外国語教師を務めた経験を持っていた。

運動の始まりと見なされているのは、1882年で、この年にフィエトルは筆名を使って小冊子「語学教授は新しく始めなければならない!」を著し、教授法改革の必要性を訴えた。また1886年にパッシーは音声学教師協会を設立する。これは1897年に国際音声学協会となる任意団体であるが、設立当初の名前は、ここに集まってきた会員たちの主要な関心のひとつに、音声学を外国語教育に応用する理論と実践方法であったことを反映している。

外国語教授法の改革自体は、その後も途切れることなく続いていくわけであるが、世紀転換期ヨーロッパの一群の音声学者たちを中心とした外国語教育刷新運動としては、世紀の変わり目あたりで一応の区切りを迎える。1899年に出版されたヘンリー・スウィートの『言語の実際的研究』や、1904年のイエスペルセンの『外国語の教授法』(*How to Teach a Foreign Language*) が、20年にわたる運動の総括ともいえる論考であった。なお、これらの音声学者の論考が全五巻の論集としてまとめられており、各巻につけられた詳しい序論と共に応用言語学の歴史を考える貴重な資料として提供されている (Howatt, A.P. R and R. C. Smith (eds.) 2002, *Modern Language Teaching: the Reform Movement*. 5 vols. I: *Linguistic Foundations*; II: *Early Years of Reform*; III: *Germany and France*; IV: *Britain and Scandinavia*; V: *Bibliographies and Overviews*).)。また、本節のリフォーム・ムーブメントに関する記述は、Howatt with Widdowson 2004 (pp.187-209) に多くを負っている。

リフォーム・ムーブメントが目指した外国語教育の方針は、第一に、音声言語の重視、第二に語や文ではなくまとまった文章の重視、第三に教室での口頭練習の重視であった (Howatt with Widdowson 2004, p.189)。音声言語重視や、教室での口頭練習の重視が、書き言葉重視、書かれたテキストの文法訳読を中心とする外国語教授法へのアンチテーゼであることはいうまでもない。ただ、注意しておかなければならないのは、これは、ネイティブスピーカー外国語教師が、その外国語だけを用いて授業を進める「直説法」(Direct Method) とは別のものだという点である。特に、同時代にベルリッツ (Maximilian D. Berlitz, 1852-1921) がアメリカで開発し成功を博した、いわゆる成人学習者を主対象とした英会話教室的教授法とは、大きく異なる。

リフォーム・ムーブメントで想定されているのは、主として学校教育課程のなかでの外国語学習であり、基本的に想定されていた教師は、学習者と同じ言語の母語話者であった。たとえば、ドイツ人に英語を教えるときには、英語の運用能力と英語についての音声学的知識を持ったドイ

ツ人のほうが、英語音声について分析的に理解していない英語ネイティブ・スピーカー教師よりも、好ましいと考えられたのである。対象外国語（英語）を学習者母語（ドイツ語）に翻訳して理解することも、基本的には禁止されていなかった。

そして、このような条件のなかでリフォーム・ムーブメントで用いられたのが、表音式綴り字などの音声表記システムを用いて書かれた教科書だった。その外国語が話されるときの音声を、学習者が教科書を通じて正確に理解し、また再生できることを目的として書かれた教科書である。

たとえば、スウィートがドイツの英語学習者のために書いた、1885年の『口語英語入門』(Elementarbuch des gesprochenen Englisch) は、ギムナジウムの外国語教師H. クリングハルト(H. Klinghardt) が、シュレジア地方のライヘンバッハにある実科ギムナジウムで用いて、実験的英語教育を行った(cf.Klinghardt 1888)。スウィートのこのテキストの英文課題文部分は、簡易ローミックで書かれている。ただ1877年の『音声学提要』で示されていたものと比べると、多くの修正と工夫が施されている。たとえば、二重字の<th>に対して鍵付きエズを用いるなどの文字の修正があるほか、音声言語をより正確に再現できるように、続けて発音される複数の語を一続きに表記するといった工夫もあった。

リフォーム・ムーブメントでは、教科書のなかの音声表記システムを工夫することによって、音声的特徴を伝えることに力点が置かれており、この点こそが、スウィートたち音声学者が、力を発揮する領域だったのである。「音声学を使って外国語を教える」ことの意味は、一般的、通俗的には「学習者に音声表記システムを教える」のことだとさえ理解されていたという(Howatt with Widdowson 2004, p.197)。なお、リフォーム・ムーブメントに大きく貢献したスウィートという音声学者を出したにも関わらず、イギリスではこの外国語教育刷新運動が、大陸諸国においてほど広まらなかった、という指摘がある。リフォーム・ムーブメントという語が、スベリング・リフォームを連想させたからだ、というのである。これもまた、リフォーム・ムーブメントにおいて、表音式綴り字や表音記号を用いた教科書の考案と使用が、大きな意味を持っていたことを示すものともいえよう。

特別な音声表記システムで記した教科書を用いるべき学習期間については、論者によって差があった。ヘンリー・スウィートは、年単位での長い期間の表音システム使用を主張しており、英語やフランス語のように不規則な正書法を持つ言語の場合は、ほぼ無期限に表音システムを用いるべきだと考えていた。原語で文学作品を読める段階に到達したときに初めて、正書法表記に移るべきだというのである。「最低2年間」といったハロルド・パーマーや、「できるだけ長く」というイエスベルセンの例もあった。

今日の外国語教育では、教科書を通じて音声を理解するといった周りくどいことをしなくても、録音・録画による視聴覚教材の使用で、外国語の音声に触れることは容易い。しかし、19世紀後半に、これは望むべくもなかった。最初に録音機械を発明したのはトーマス・エジソンで、1877年にフォノグラフを発明した。1878年にはアレグザンダー・グレアム・ベルのグラフォフォン、1887年にはエミール・ベルリナーがグラモフォンの特許をとる。こうした録音技術を、

外国語学習と結びつけた初期の事業のなかには、リングフォンの独習用録音教材があるが、それも20世紀に入ってからのことであった。リフォーム・ムーブメントが起こっていた1880年代、1890年代には、録音再生技術は、まだまだ最先端の科学技術であり、学校での外国語教育教材として実用化を考える時期ではなかったのである。逆に、こうした表音システムを本文に用いた教科書が、第二次世界大戦後にはごく少数になり、今日では、教師用参考書はともかくとして、学習者用教科書としては、ほとんど存在しないのも、音声教材が活用できるようになったからにほかならない。

【綴り字改革論から速記考案へ】

話を再び「綴り字改革と言語の実用的研究」に戻そう。音声学の外国語学習への応用を論じたこの論考は、前項で述べたような外国語教授法刷新運動の一環となる言説だった。ところが、奇妙なのは、タイトル前半の「綴り字改革」との関連であった。というのも、スウィートは、この論考のなかで、タイトルとは裏腹に、自らの強い関心が、綴り字改革運動から離れ始めていることを示すことになったからである。

この論考のなかで、スウィートは、綴り字改革の手段として、表音式綴り字ではなくて、速記を取り入れることを提案している。最もはっきりと述べているのは、「綴り字改革問題について、最終的な唯一の解決方法となるのは、普遍的な表音式速記の導入である」と考える。体系的に組み立てられながらも、それぞれの個別言語に応用できるだけの柔軟性をもった速記の導入である」(Sweet 1885c, p.11, 下線引用者)の箇所であるが、この他にも数箇所、同主旨の発言が見られる。

この論考で、スウィートがこのように表音式速記を、綴り字改革問題の「最終的な唯一の解決方法」と主張した原因は、主に二つあった。一つは、スウィート自身が、速記「カレント」を作成し出版へ向けて準備していた、という積極的な理由であり、もう一つは、英語綴り字改革協会で、綴り字改革案を合同で作りに上げていこうとする努力が、実を結ばなかったことへの不満、という消極的な理由である。

まず、積極的理由である速記考案について見てみよう。表音式綴り字への綴り字改革案と表音式速記法考案が、関心領域として隣接しており、どちらにも関心を持つひとが少なくないことは、アイザック・ピットマンや彼の支持者の例を見れば明らかである。いわんや、スウィートは、音声言語の表記システム全般に強く関心を持っていたのである。速記考案に関心があっても不思議ではなかった。

スウィートの場合は、1869年にメルヴィル・ベルが速記「ユニヴァーサル・ステノフォノグラフィ」(Universal Steno-phonography)を考案したときに、これを学んで使い始め、1883年に自分でもこれに若干の修正を加えようと試みたのが、速記考案のきっかけとなった(Sweet 1892, p.xii)。スウィートは1883年の末には、ベルの速記法に不満を抱くようになっており、ベルの「ヴィジブル・スピーチ」などの音声表記システムを参照しながら、自らの速記カレントの

考案を始め、1884年の初めにはその第一段階を完成させる (p.xiii)。そして第二段階を経て、1885年4月には、カレントの最終段階である第三段階を作り上げることになる (p.xiv)。

つまり、1884年の12月に英語綴り字改革協会の例会で「綴り字改革と言語の実際的研究」を発表したとき、スウィートはまさにカレント考案の真最中にあつたのである。ちなみに、その約8ヶ月前、1884年4月に言語学会の年次大会で発表した「言語の実際的研究」のなかでもスウィートは「普遍的な表音式速記」の必要性に触れ、それが「綴り字改革問題の唯一の本当の解決法になると信じている」と述べている。この時期、表音式速記考案は、スウィートにとって大きな関心の対象だつたことがうかがえる。

1885年にはスウィートは速記協会 (Shorthand Society) にも入り、例会に参加した (MacMahon 1981, p.267)。これは、1881年に、いろいろな流派の速記者が集まって作った協会で、1888年に内部分裂によって解散するまで続いた。1884年6月の例会ではアイザック・ピットマンも中心的メンバーの一人として講演を行っている (Baker 1980, pp.232-3)。

スウィートは1885年までに、表音原則による「表音式カレント」(Phonetic Current) を完成させ、次に、現行の正書法表記を翻字するための「正書法式カレント」(Orthographic Current) の考案にとりかかり、1888年末には完成させた (Sweet 1892, p.xv)。出版社クラレンドン・プレスとの数年にわたる交渉の末、最終的に、『カレント速記法マニュアル』が、廉価な写真平板印刷で出版されたのは、1892年のことであつた (MacMahon 1981, p.267)。

速記法カレントは広まっただろうか。答えは否であつた。バーナード・ショウは、ヘンリー・スウィートをモデルの一人にした戯曲「ピグマリオン」のなかで、主人公の音声学者ヘンリー・ヒギンズ教授に、「特許をとつた速記法」を使わせているが、序文では、スウィートが、ピットマンのように、自分の速記を広める事業努力をしなかつたこと、商業的野心の欠如が、普及失敗の原因だと分析している。

【英語綴り字改革協会への不満】

「綴り字改革と言語の実際的研究」でスウィートが綴り字改革よりも、自分の速記を推奨したのは、英語綴り字改革協会での、綴り字改革案の議論がなかなか進まないことへの不満からでもあつた (Sweet 1885c, pp.10-11)。

「私たち (=英語綴り字改革協会) は検討を始めたときには、皆、英語綴り字の改革は、実は非常に単純な問題であり、必要なのはほんの少しばかりの良識だけだ、と信じていました。しかし、その良識ゆえに、何年も何年も、次から次へと新しい綴り字改革案が生み出されてきたのを見ると、何か他の策を講じる必要だということになつたのです」(p.10)。

そして、英語綴り字改革協会は、1880年代後半以降、活動が停滞し、やがて停止するに至る。1880年夏から定期的に刊行されていた月刊誌『スプリング・リフォーマー』の刊行も途絶えており、今ではその後の活動の記録は、ピットマンの週刊紙『フォネティック・ジャーナル』の記事から、年次大会の様子などをうかがい知ることができるくらいである。一方、スウィートが自

らの綴り字改革論の足場にしていた言語学会においても、公認となった「英語綴り字の部分的修正」が、1880年代後半には、議事録でもほとんど用いられなくなっていた（山口2004）。

このように、綴り字改革運動全体が、1870年代後半から1880年代初めにかけての勢いを失ったことと、スウィートが綴り字改革論から他へ関心移していったことは、決して無関係ではないだろう。外国語教育との関連でいうならば、1886年に設立された音声学教師協会が、表音システムに関心を持つ人々をひきつける受け皿になっていった。当初は、綴り字改革論者たちが、発音記号（国際音声記号）制定の議論と、綴り字改革の議論を混戦させるという状況も見られたようであるが、音声学教師協会は、やがて、国際音声学協会となり、音声学研究の団体としての性格を打ち出していく。一方で、綴り字改革論者たちの団体が結成されるのは、1906年になってからのことであった。スウィートは、このときも存命であり、表音式綴り字に関する論考を国際音声学協会の雑誌に投稿したりしている。しかし、1906年に結成された「綴り字簡略化協会」のなかには、スウィートの姿はなかった。ウォルター・スキートやジェームズ・マリーなどのかつての綴り字改革運動の盟友が、名前を連ねているなか、スウィートは、もうここに関わることはなかった。

注

- 1) なお、“A Greek Grammar with the Greek and English Characters”は、今回の調査で、その所在を、各種図書館カタログ上でも確認することができなかった。この論考の存在と表題表記は、ワッツの追悼文による。Latham (1872) には、“A Grammatical Sketch of the Greek Language”して言及されている (Latham 1872, p.3)。
- 2) もっとも、スタンダード・アルファベットは、アフリカ学者のカール・マインホフ (1857-1944) やその宣教師のカール・エンデマン (Karl Endemann, 1836-1919)、ヴィルヘルム・シュミット (P. Wilhelm Schmidt, 1845-1921) などによって利用された。しかし、こうした何人かの使用を超えて、それ以上の広い支持を得るにはいたらなかった。考案者レプシウスのベルリン・アカデミーにおける名声や、英国聖公会宣教師協会の経済力をもってしても、無理だったようである。
- 3) 「標準的な発音」は、18世紀後半以降、社会的に徐々に強く意識されるようになった。綴り字改革に関心を持つ人だけではなく、それよりもはるかに多くの人々が、標準的な発音、正しい発音の社会的意義・重要性を意識するようになっていた。

1750年代にはエロキューション（話し方）の専門家が現れ、講演や書物を通じて人々に話し方を教えた。その嚆矢であるトマス・シェリダンは、1756年に『英国の教育』を著したのち、1757年には、ダブリン、エジンバラ、オックスフォード、ケンブリッジ、ロンドンで講演を行い多くの聴衆を集めた。「発音は……その人がしかるべき相手と交際してきたことを示す証拠のようなものなのです。ですから洗練されているとか、垢抜けしていると見られたいと思う人は、誰でもしかるべき発音を身に着けたいと思うものです」（ブラッグ2004, p.244）という明確な考え方が、社会的上昇を目指す中流階級に受け入れられたのである。シェリダンは1780年に発音を詳しく記した『英語辞典』（*A General Dictionary of the English Language*, 1780）も出版している。

続いて1791年には、ジョン・ウォーカー (John Walker, 1732-1807) の『精密英語発音辞典』（*John Walker, A Critical Pronouncing Dictionary and Expositor of the English Language*, 1791）が

出版された。序文で記した545か条の規則をもとに、シェリダンに倣って数字を用いて母音を表記した。難読語の発音を権威を持って記述したこの辞典は、図書館や学校の蔵書としても人気を集めた。1904年までの間に100版以上を重ね、19世紀にウォーカーの発音辞典を元にして作られた辞典は20種類を超える。18世紀末から19世紀を通じて、もっとも影響力がありよく参照される発音辞典であり続け、1917年になってダニエル・ジョーンズの『英語発音辞典』(*An English Pronouncing Dictionary*)が現れたときに、ようやくその座を譲り渡したのである(『国民伝記辞典』)。

「標準発音」と見なされていたのは、社会の中枢で権力を掌握している上流階級の英語、イングランド南部とくにロンドンの、高等教育を受けた人々の話す英語の発音であった。上流、上層中流階級の家庭では、高価な学費を払って子どもを全寮制私立パブリック・スクールに通わせ、その閉ざされた空間のなかで地域訛りを捨て、標準発音を習得させようとした。標準英語は、特権階級の社会方言(階級方言)だったのである。

そして、その階級方言、つまり上流の話者と同じような発音の英語を習得することが、社会的上昇には必要であるという考えが、中流階級を中心に広く受け入れられるようになった。また、そうすることで実際に社会的上昇が可能になる、もしくは少なくとも容易になる、と人々が考え始めたのが18世紀後半であった。発音を矯正することで社会階級を上昇できるという考え方は、のちに20世紀初頭にバーナード・ショウの戯曲「ピグマリオン」(後にミュージカル「マイ・フェア・レディ」)のモチーフにもなった。つまり、音声学者が花売り娘のcockney訛りを矯正して社交界に送り込むというこの芝居のプロットを支える主題は、18世紀にまで遡ることができるのである。そこに何らかの違いが見られるとすれば、それは社会的流動性の程度差のみであろう。

18世紀後半から19世紀に入り、中流階級は経済力を強め、経済的な意味で社会的上昇を果たすことが可能になった。そして、逆説的ではあるが、社会階級の流動性が強く意識されるようになった時代というのは、根本的に、階級意識そのものが高まった時代でもあった。18世紀半ばには、それまでは用いられていなかった「下層階級」「最下層階級」「中流階級」と言った表現が広く使われるようになり、19世紀半ばにはさらに細分化して「下層中流階級」「上層中流階級」「下層労働者階級」「上層労働者階級」「熟練階級」「上流階級」「中層中流階級」(ブラッグ 2004, p.266)などといった表現も使われるようになった。こうした細分化は、階級間、階層間の差異が一層強く意識され、強調されるようになったことを表している。そしてその結果、経済力以外の指標によっても、階層の差異化、特徴づけが行われるようになった。言葉遣いの違いもこうした特徴のひとつと見なされるようになり、文法や綴り字などと並んで、話し言葉の発音が規範に従っているか、標準的であるかどうか、が階層を区別する徴となったのである。

- 4) なお、この書物は、『言語の実際研究』という邦題で翻訳が出ている。practical studyの訳語は、これに従った。なお、ここでのpracticalには、単に「实际的、実用的な」の意味だけではなく、practiceの、練習のための、という意味もあった。

参考文献

欧文文献

- Aarsleff, Hans. (1983) *The Study of Language in England, 1780-1860*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Alter, Stephen G. (1999) *Darwinism and the Linguistic Image: Language, Race, and Natural Theology in the Nineteenth Century*. Baltimore and London: John Hopkins University Press.
- . (2005) *William Dwight Whitney and the Science of Language*. Baltimore and London: John Hopkins University Press.
- Asher, R. E. and Eugenie J. A. Henderson. (1981) *Towards a History of Phonetics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

- Bacon, Alan. (ed.) (1998) *The Nineteenth-Century History of English Studies*. Aldershot: Ashgate.
- Baker, Alfred. (1908)[1980] *The Life of Sir Isaac Pitman*. London: Sir Isaac Pitman & Sons, Ltd.
- Beal, Joan. (1999)[2002] *English Pronunciation in the Eighteenth Century: Thomas Spence's Grand Repository of the English Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Bragg, Melvyn. (2003) *The Adventure of English: the Biography of a Language*. (『英語の冒険』メルヴィン・ブラッグ著, 三川基好, 東京: アーティストハウス, 2004年)
- Crowley, Tony. (1989) *Standard English and the Politics of Language*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press.
- Daniels, Peter T. and William Bright. (1996) *The World's Writing Systems*. New York and Oxford: Oxford University Press.
- Davies, Anna Morpurgo. (1998) *Nineteenth-Century Linguistics*. *History of Linguistics*, ed. by Giulio Lepschy, Vol. IV. London: Longman.
- Diderichsen, Paul. (1976) *Rasmus Rask und die grammatische Tradition: eine Studie über den Wendepunkt in der Sprachgeschichte*. München: W. Funke.
- Freeman, Edward. (1998) "Literature and Language (Extracts)," in Bacon ed. (1998).
- Gneuss, Helmut. (1966) *English Language Scholarship: a Survey and Bibliography from the Beginning to the End of the Nineteenth Century*. New York: Medieval & Renaissance Texts & Studies. (『英語学史を学ぶ人のために』ヘルムート・グノイス著, 大泉昭夫訳, 京都: 世界思想社, 2003年)
- Green, Jonathan. (1996) *Chasing the Sun: Dictionary-Makers and Dictionaries They Made*. (『辞書の世界史』ジョナサン・グリーン著, 三川基好, 東京: 朝日新聞社, 1999年)
- Harris, Roy and Talbot J. Taylor. (1989) *Landmarks in Linguistic Thought: The Western Tradition from Socrates to Saussure*. London: Routledge. (『言語論のランドマーク—ソクラテスからソシュールまで』ロイ・ハリス, タルボット・J・テイラー著, 齊藤伸治・滝沢直宏訳, 東京: 大修館書店)
- Henderson, E. J. A.(ed.) (1971) *The Indispensable Foundation: a Selection from the Writings of Henry Sweet*. London: Oxford University Press.
- Howatt, Anthony. P. R. with H. G. Widdowson. (2004) *A History of English Language Teaching*. London: Oxford University Press.
- Kelly, J. (1981) "The 1847 Alphabet: an Episode of Phonotypy" in Asher and Henderson ed.
- Kemp, J. A. (1995) "History of Phonetic Transcription," in E. F. K. Koerner & R. E. Asher ed. *Concise History of the Language Sciences*. Oxford: Elsevier Science Ltd.
- Kinghardt, H. (1888) *Ein Jahr Erfahrungen mit der neuen Methode*. Marburg: N. G. Elwert'sche Verlag.
- Latham, Robert Gordon.(1834a) "Abstract of Rask's essay of the sibilants and his mode of transcribing works in the Georgian and Armenian languages by means of European letters; with remarks." Cambridge: Grant.
- . (1834b) "An Address to the Authors of England and America on the Necessity and Practicability of Permanently Remodelling their Alphabet and Orthography." Cambridge and London: Grant.
- . (1840a) *An Inaugural Lecture Delivered at University College, London, October 14, 1839*. London: Taylor and Walton.
- . (1840b) *Norway and the Norwegians*. London.
- . (1841 [1850]) *The English Language*. 3rd.ed. London: Taylor, Walton, and Maberly.
- . (1850) *Natural History of the Varieties of Man*. London: J. V. Voorst.
- . (1854) "Ethnology," *Natural History Department of the Crystal Palace Described*.
- . (1855) "On the Importance of the Study of Language, as a branch of education for all classes," in *Lectures on Education*, London: Royal Institute of Great Britain.
- . (1862) *Elements of Comparative Philology*. London: Walton and Maberly.
- . (1872) *A Defence of Phonetic Spelling*. Bath: Pitman.

- . n.d. “Principles of Phonetic Spelling. Extracted from “An Address to the authors of England and America, on the necessity and practicability of permanently remodelling their orthography” Bath: Pitman.
- MacMahon, Michael (1981) “Henry Sweet’s System of Shorthand,” in Asher and Henderson ed. (1981).
- . (2001) “Modern Language Instruction and Phonetics in the Later 19th Century,” in *History of Language Sciences: An International Handbook on the Evolution of the Study of Language from the Beginnings to the Present*. ed. by Sylvain Auroux, E. F. K. Koerner, Hans-Josef Niederehe, Kees Versteegh, Vol. 2, Berlin and New York: Walter de Gruyter, pp.1585-1595.
- Markey, T. L. (1976) “Rasmus Kristian Rask: His Life and Work,” in Rask (1976), pp.xv-xxxv.
- Mugglestone, Lynda. (1995)[1997] *‘Talking Proper’: The Rise of Accent as Social Symbol*. Oxford: Clarendon Press.
- . (ed.) (2000) *Lexicography and the OED: Pioneers in the Untrodden Forest*. Oxford: Oxford University Press.
- Müller, Friedrich Max. (1864) *Lectures of the Science of Language*. London: Longman.
- Philological Society. (1881) “Partial Corections of English Spelling.”
- Pullum, Geoffrey K. and William A. Ladusaw (1996) *Phonetic Symbol Guide*. 2nd. ed. Chicago: University of Chicago Press. (『世界音声記号辞典』ジェフリー・K・プラム/ ウィリアム・A・ラデューサー著, 土田滋・福井玲・中川裕訳)
- Quirk, Randolph. (1974) *The Linguist and the English Language*. New York: St. Martin’s Press.
- Rask, Rasmus Kristian. (1830) *A Grammar of the Anglo-Saxon Tongue*, with a Praxis. trans. by Benjamin Thorpe. Copenhagen: S. L. Moller.
- . (1976) *A Grammar of the Icelandic or Old Norse Tongue*. trans. by Sir George Webbe Dasent, New edition with a Preface, an Introductory Article, Bibliographies and Notes by T. L. Markey.
- Sayce, Archibald. (1880) *Introduction to the Science of Language*. Vol. 1 & 2, London: C. Kegan Paul & Co.
- Stocking, Jr., George W. (1987) *Victorian Anthropology*, New York: Free Press.
- Sweet, Henry. (1877)[1988] *A Handbook of Phonetics*. ed.by Kenzo Kihara, Tokyo: Sansendo.
- (1884) “Spelling Reform and English Literature,” Cambridge Philological Society.
- (1885a) *Elementarbuch des gesprochenen Englisch*. Oxford: Clarendon Press.
- (1885b) “The Practical Study of Language,” *TPS* 1882-84, pp.577-599.
- (1885c) “Spelling Reform and the Practical Study of Language,” English Spelling Reform Association.
- (1890a) *A Primer of Phonetics*. Oxford: Clarendon Press.
- (1890b) *A Primer of Spoken English*. Oxford: Clarendon Press.
- (1892) *A Manual of Current Shorthand*. Oxford: Clarendon Press.
- (1899) *The Practical Study of Languages: a Guide for Teachers and Learners*. London: Dent.
- Taylor, Isaac. (1883)[1991] *The Alphabet: an Account of the Origin and Development of Letters*. New Delhi: Asian Educational Services.
- Watts, Theodore. (1888) “Dr. R. G. Latham,” *The Athenaeum*, No. 3151, March 17, 1888, pp.340-1.
- Wiley, Raymond M. (ed.) (1971) *John Mitchell Kemble and Jakob Grimm: a correspondence 1832-1852, unpublished letters of Kemble and translated answers of Grimm*. ed. and trans. by Raymond Wiley. Leiden: E. J. Brill.
- Wrenn, C. L. (1946) “Henry Sweet,” *TPS* 1946, pp.177-201.

邦文文献

- イエスペルセン, オットー (1988) 『ラスムス・ラスク』新谷俊裕訳, 東京: 大学書林。(Rasmus Rask: i hundredaret efter hans hovedvaerk, Kjobenhavn: Gyldendalske boghandel. 1918の抄訳)。
- (2002) 『イエスペルセン自叙伝: ある語学者の一生』大澤銀作訳, 東京: 文化書房博文社 (デンマーク語原文 *En sprogmands levned* の英訳 *A Linguist's Life* からの翻訳)
- 石橋幸太郎, 中島邦雄, 山本和之, 小野茂 (1967) 『H. スウィート』南雲堂版不死鳥英文法ライブラリ 1 東京: 南雲堂。
- 石橋幸太郎, 桃沢力, 五島忠久, 山川喜久男 (1964) 『O. イエスペルセン』南雲堂不死鳥英文法ライブラリ 10 東京: 南雲堂。
- 風間喜代三 (1978) 『言語学の誕生—比較言語学小史—』東京: 岩波書店。
- 小泉保・牧野勤 (1971) 『音韻論1 英語学大系1』東京: 大修館。
- 佐々木達・木原研三編 (1995) 『英語学人名辞典』東京: 研究社。
- トムセン, ヴィルヘルム (1968) 『言語学史』泉井久之助, 高谷信一訳, 清水弘文堂書房。
- 山口美知代 (2004) 「イギリス言語学会の綴字改革案 (1881): 国民教育と *OED* 編纂の時代」『京都府立大学学術報告 人文・社会』第56号, pp.53-104。
- (2005) 「ロンドン学務委員会と英語綴字改革運動: 王立調査委員会設置の請願 (1878) をめぐって」『京都府立大学学術報告 人文・社会』第57号, pp.77-127。
- 吉田和彦 (1996) 『言葉を復元する 比較言語学の世界』東京: 三省堂。

(2006年9月27日受理)

(やまぐち みちよ 文学部助教授)